縄文時代丸木舟の形態について～前か後ろか（予察）

沖　松　信　隆

目　次

1　はじめに …… 319

2　丸木舟の形態分類 …… 319

3　出土丸木舟に見る舟体端部形状について …… 322

4　舟首（舳先）と舟尾（艫）の区別について …… 349
（1）両端部の差異に関して …… 349
（2）使用時のイメージについて …… 350

5　おわりに …… 352

1　はじめに

筆者は縄文時代の丸木舟を発掘調査する機会をこれまでに２度得てきたが、舟体の舟首（舳先へさき）と舟尾（艫とも）を特定するのはなかなか悩ましい問題であった。というのも、縄文時代の丸木舟は、その多くが前後対称のいわゆる「鰹節形」の形態をしているからである。しかし中には、舟首と舟尾で形の違う事例も存在し、一見両端部が同様な形態の舟体にも、細部の作りを見ると違いが認められる事例が存在する。

本稿では、これまで報告された出土丸木舟のうち両端部の形状がわかる資料を主に取り上げて、舟体の両端部の区別がどのようになっているのか見ていきたい。「鰹節形」など、舟形を示す用語についても整理するため、まずはこれまでの研究史を概観したい。

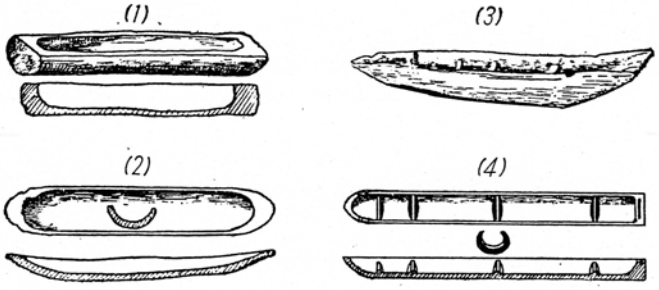
2　丸木舟の形態分類

古代の丸木舟の研究は、その初期段階から形態に関心が向けられてきた。大正から昭和（戦前）にかけて、西村眞次氏はヨーロッパの研究成果を当てはめ、丸木舟の平面形態を「割竹型（ゲルマン型・メーリンゲン型）」、「鰹節型（サセックス型・ローベンハウゼン型）」、「箱型（サントーバン型）」の３つに分類した（西村1938）。

戦後になると、千葉県加茂遺跡で計画的な発掘調査により縄文時代の丸木舟が出土し、土器との明確な共伴関係が確認された。調査に携わった松本信廣氏はそれまでに発見された丸木舟を整理し、年代的な位置づけを考察している（松本1952）。形態分類については、石井謙治氏が西村分類に新たに「折衷型」を加えた（図１・石井1957）。その後、同じく加茂遺跡の調査に関わった清水潤三氏は石井分類を採用して１「割竹形」・２「鰹節形」・３「折衷形」・４「箱形」の４つに分類すると共に、横断面に着目して木取りの違いからＡ「半円形」・Ｂ「凹形」・Ｃ「半円特殊形」の３つに分類した（図２）。これらを組み合わせて実際の出土例に当てはめて、時期的な検討を行なった（清水1975）。現在でもこの分類が基本となっている。

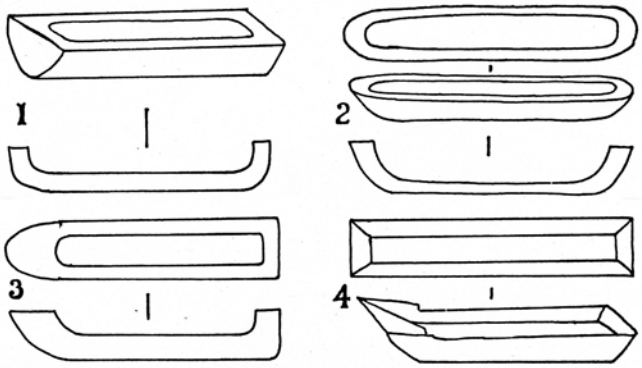
一方で現存する丸木舟の研究から、櫻田勝徳氏は横断面に見る単体丸木舟から複材船の変遷を想定した（図４・櫻田1958）。これに対し、出土資料から現存資料まで丸木舟の総合的な研究を行なった川崎晃稔氏は、櫻田氏が示した最初の複材化（図４－Ｂ）を想定より時代が下ると評価している。また、現存する丸木舟を平面形態と断面形の組み合わせから、機能別に７つのタイプに分類した（図５・川崎1991）。出口晶子氏は先の横断面分類を発展させ、シキ（船底板）とタナ（舷側板）の発達をx軸・y軸に置いて、多様な事例を包括するモデルとした（出口2001）。

形態分類については、発掘出土事例の飛躍的増加という背景もあり、清水氏の分類を基本としながらも新たなモデルが提示されている。小林謙一氏は、平面形態から１類（断面形が弧状をなし、やや深い形状、いわゆる鰹節形のもの）と２類（舟底がやや平らかで高さが浅いもの）に分類し、内部施設の有無からａ（特に内部施設の認められないもの）とｂ（内部に削り出しの横帯が残されるもの）に分類した（小林2015）。この論文は年代的な位置づけが主眼で形態分類は主要テーマではないが、小林氏も言うように「横断面形による（～中略～）区分も重要であるが、断面図が付されていなければ図から判断することは困難」な状況への現実的な選択と言えよう。

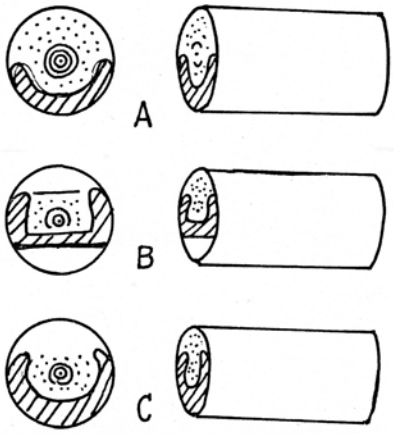


刳船の四型式　(1)割竹型（メーリンゲン型）　(2)鰹節型（ロベンハウゼン型）　(3)箱　型（サントーバン型）　(4)折衷型

図１　丸木舟の形態分類（石井 1957）

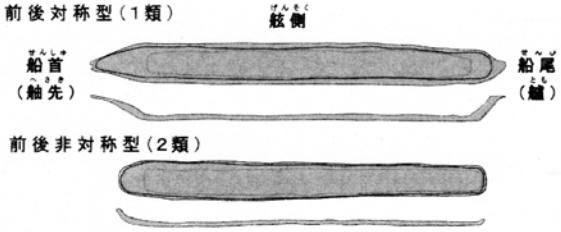


第２図　独木舟の形態　１割竹形　２鰹節形　３折衷形　４箱形



第３図　横断面による分類（木取法模式図）

図２　丸木舟の形態分類と断面分類（清水 1975）



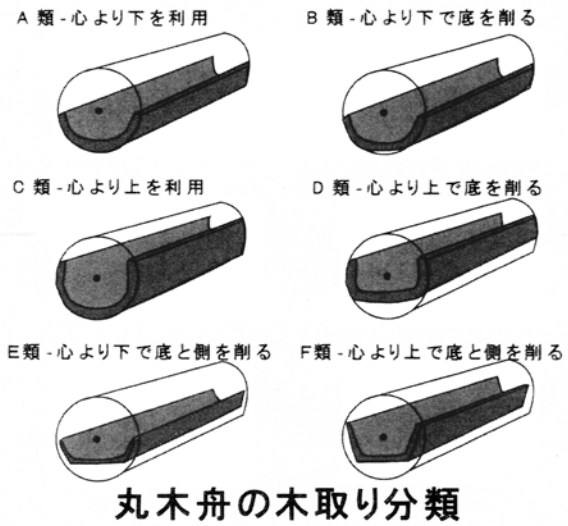


図３　丸木舟の平面形分類と断面分類
（荒川 2018ほか）※新潟県埋蔵文化財センターホームページより
（https://www.maibun.net/kikaku/H30_natukikaku/H30_natukikaku.html）

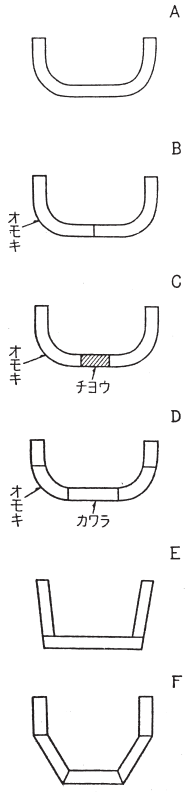


図4　丸木舟の断面分類
（櫻田 1958）

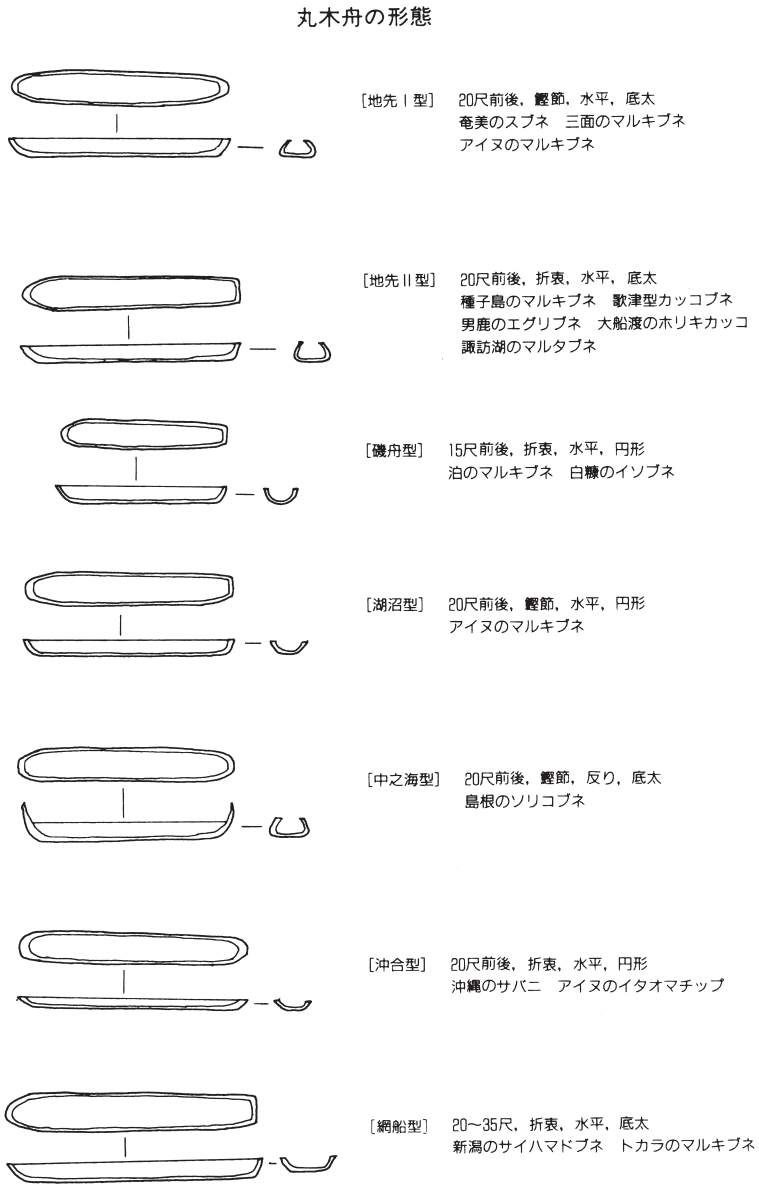


図5　丸木舟の形態分類（川崎 1991）

荒川隆史氏は、近年の丸木舟の出土数増加によって、清水分類では包括できない出土例が現れるようになったことから、新たな形態分類案を示した（荒川2018、2021）。平面形は前後対称型（１類）と前後非対称型（２類）の２つとし、横断面の木取り分類は、芯との位置関係や削る面の区分から、清水分類の一部を細分することでＡ類～Ｆ類の６分類とした（図３）。

川崎氏の機能分類とは別に、出土丸木舟に対する機能から見た形態分類も提示されてきた。横田洋三氏は奄美大島の現存丸木舟の区別を参考にして、琵琶湖沿岸の事例を「船首、船尾の立ち上がりが緩やかで平面形は両端が比較的尖るもの」をＡ類、「（船首・船尾の）立ち上がりが比較的急で平面形は両端が丸いもの」をＢ類に分類した。そして奄美大島の「海洋型」に相当するＡ類を「本湖型」、「河川型」に相当するＢ類を「内湖型」とした（横田1990、1992）。

山陰地方の縄文時代丸木舟を集成した中原　斉氏は、航行の安定性を左右する舟体の深さに着目して、「深さ20～30cmを測るもの」をａ類、「深さ10cm前後を測るもの」をｂ類とした。ａ類は外洋性漁労や地域

間交流に用いる外洋航行用、ｂ類は波の静かな内水域を舞台に内湾性漁労や集落間の物資運搬等を役割とする内水域航行用とに使い分けられたと想定した（中原1998）。

山岸良二氏は千葉県九十九里浜の旧椿海周辺の縄文時代丸木舟を検討し、「外洋航行用」と「内湾・河川航行用」の２種があることを指摘している。旧椿海湖岸地域で腐食土中から検出された大型の鰹節形丸木舟は、大型の割に舟底が薄く精巧な均一性をもっている。こうした作りはスピードが出る工夫ととらえ、「外洋航行用」であるとした。これに対し湖内側で検出された小型の丸木舟は砂層中からの出土が多く、カヤ材を用いて舟体内部には横梁が設けられている。こちらは日常的な「内湾・河川航行用」としている（山岸2004）。この分類は単に形態的な違いだけでなく、出土レベルと出土層位にも対応している点が興味深い。

舟体の形態を構成する要素として、舟体の規模というのも重要な要素の一つである。全国の縄文時代丸木舟の法量を比較した松田真一氏は、舟体の規模は「用途よりはむしろ地域と用材」という視点でとらえる必要性を指摘する。全国30例の丸木舟の全長を比較した結果、琵琶湖周辺と福井県以西の日本海側では滋賀県松原内湖遺跡の１隻を除きすべて５ｍ以上であること、そのほかの５ｍ以下の事例はすべて東日本出土であることが注目される。全長５ｍ以上の東日本出土例は全体の三分の一に限られるという。このことについて松田氏は、西日本では一貫してスギ材が優勢であるのに対し、東日本ではほとんど用いていないという用材の選択と地域性に関係する可能性を指摘している（松田2003）。

３　出土丸木舟に見る舟体端部形状について

それでは縄文時代の丸木舟について、両端部の形状がある程度わかるものについて見ていきたい。片側の先端部が欠損していても参考例として扱うものも含まれる。

平面形と断面形を中心に、清水氏の分類に基づいて記述していく。なお、「鰹節形」の先端部形状について、尖っているものを「Ｖ字形」、丸みを帯びたものを「Ｕ字形」と表現する。

【埼玉県】

１．さいたま市膝子遺跡（図６－１、２：柳田1957、３：清水1975）

綾瀬川流域のさいたま市（旧大宮市）膝子地区に所在する。昭和30年代に土地改良工事中に水田から丸木舟が発見された。付近一帯では20隻以上の丸木舟が確認されており、三回の発掘調査で丸木舟６隻、櫂８本が検出された。

１は全長4.88m、幅約0.4mで、地表下1.2mの草炭と粘土層から出土したという。２は調査を行い、草炭層と粘土層の中間から出土した。全長約７ｍ、幅50㎝で、大型の舟体である。舟体の両側に自然木が「とりつけてあった」という。報告では触れていないが、舟体内部に横梁を２か所設けている。材質はクリとされる。舟底に密着して縄文時代後期安行式土器の破片が出土していることから舟の時期は縄文時代後期と考えられる。

両者とも平面形は鰹節形と言えるだろう。１は先端部がやや尖り気味で両端部に違いは認められない。２は先端部が丸みを帯びており、両端部にわずかな違いがあるのかもしれない。片側がやや方形を呈しているとも言えよう。

３は全長約4.4m、幅約40㎝、厚さ約５㎝である。材質はクリで、時期は縄文時代後期である。清水氏

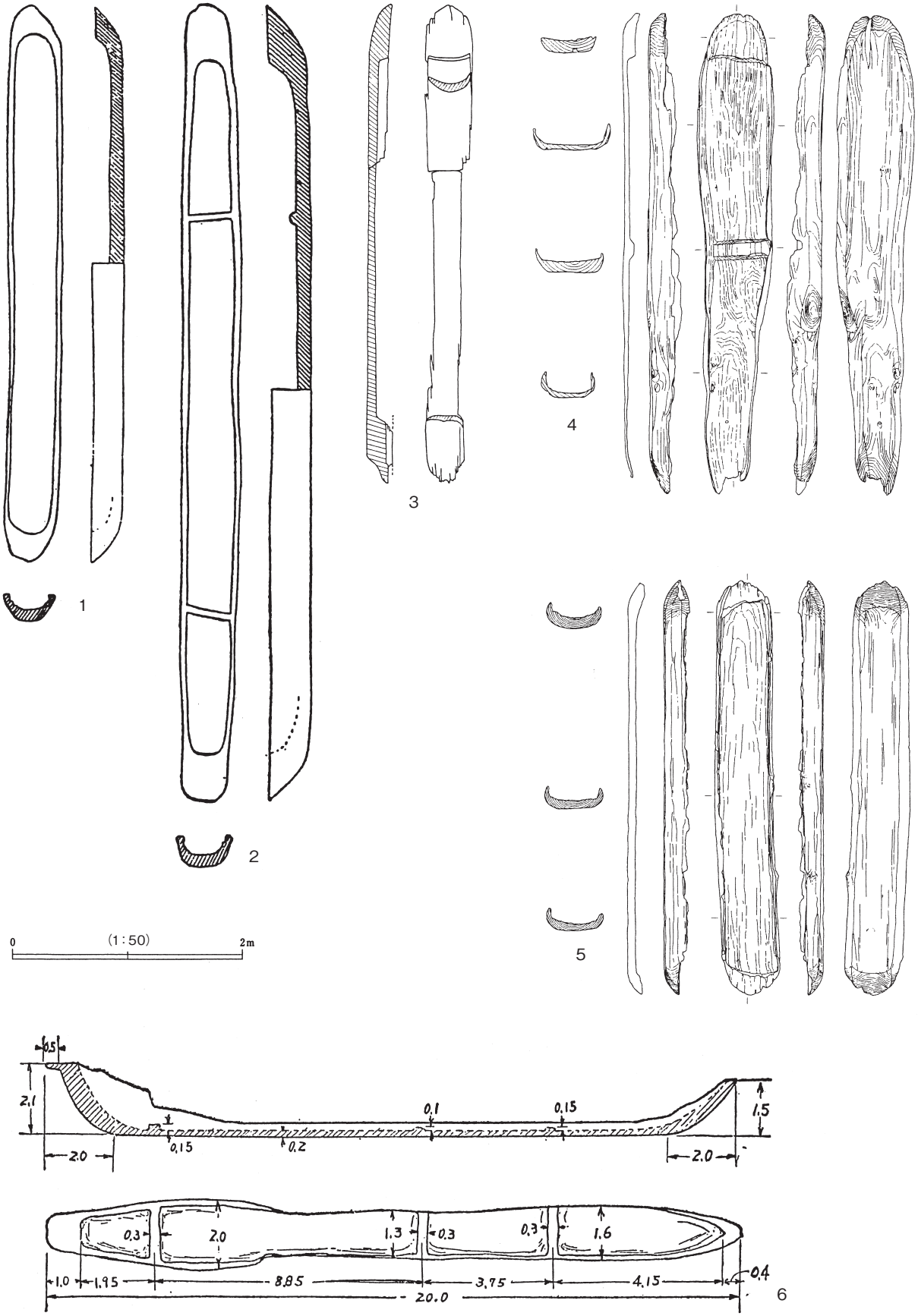


図6　出土丸木舟1（埼玉県）

は３Ａ式（箱形・半円形）に分類している。「上面観が角張っている」とのことだが、両端部とも丸みを帯びているので鰹節形としておきたい。縦断面形には違いがみられる。片側は舟底外面が緩やかに立ち上がり、他方は急な角度で立ち上がり先端部が突出している。

２．さいたま市南鴻沼遺跡（図６－４、５：小倉ほか2017）

荒川流域のさいたま市中央区大戸１丁目に所在する。道路建設に伴い、さいたま市遺跡調査会が発掘調査を実施した。丸木舟は縄文時代中期１隻・後期２隻の３隻が出土している。このうち中期後半の第３号丸木舟（４）と後期前葉の第１号丸木舟（５）は遺存状態が良い。残りの後期１隻は倒位の状態で杭列とともに検出されたことから、木道への転用が想定されている。遺跡からは櫂も出土した。

４は第６層の草本質粘土層の下層から水平に正位の状態で出土した。全長4.2m、最大幅57㎝、厚さ４～5㎝で、深さは14～18㎝である。舟尾側（図下方）の先端部が欠損しているが、全体的に保存状況は良い。舟体の平面形は舟首側が丸みを帯びて、舟尾側に向かって細くなっていく流線的な形状をしている。これは原木の枝分岐の影響を受けた結果とみられる。舟尾側はやや先細りの形状になるとみられるが、両端部ともＵ字形と推定されるので鰹節形である。

舟首側先端部は刳り残して舟底より一段高い平坦部となっている。舟内中央付近には横梁を設けている。木取りは芯に近い部分を採用した清水氏分類の凹形を示しており、舟底が平坦である。材質はクリで、時期は^{14}Ｃ年代測定の結果から縄文時代中期後半とされる。

５は３層の草本質灰色泥炭層の下層から水平に正位の状態で出土した。全長3.6m、幅46㎝である。厚さは7～10㎝で、３号舟の倍近い厚みがある一方で、深さは12㎝で３号舟よりも浅い。舟首側先端部の一部を欠損しているが、全体的に保存状況は良い。舟体内部の不整形さと刳り込みの浅さから未成品の可能性が指摘されているが、平面形はほぼ完成品の状態と言ってよいだろう。

平面形は典型的な鰹節形で両端部とも丸みを帯びている。縦断面形では、舟首側の方が舟尾側より厚みがあるように見えるが、有意な違いと言えるか判然としない。木取りは樹皮側に近い半円形だが、舟底外面は３号舟と同じく平坦に仕上げようとしている。舟首付近は丸みが残っているが、整形途中なのか意図的なのかは不明である。材質はクリで、時期は^{14}Ｃ年代測定の結果から縄文時代後期前葉とされる。

３．草加市綾瀬川（旧新田村）出土地点（図６－６：石井1957・元出典 埼玉県1931）

綾瀬川下流域の草加市金明町（旧新田村）に所在する。昭和４年（1929年）に綾瀬川の川底浚渫工事の際に川底から発見された。全長6.06m、幅40～60㎝、厚さ６㎝である。舷側はほとんど残っていないので、本来の深さは不明である。

平面形は鰹節形であるが、舟体の幅は均等ではなく両端部にふくらみがある。石井文献（石井1957）と草加市史（草加市史編さん委員会1988）でとらえ方が異なるが、草加市史では図左方を舟首[1]とする。中央部の幅が約40㎝に対し、舟首側で約60㎝、舟尾側で50㎝となっている。上面観では舟首手前でくびれを有する。縦断面形も特徴的で、両端部がせり上がるゴンドラ状の形態を呈している。特に舟首側の高さは65㎝を測る。舟首の先端部は板上に突き出ており、方形を呈している。石井氏の記述によれば、この板状部分に小孔があるという。さらに舟底内部には横梁が設けられている。他方の舟尾側は平面的に細長く、横梁の位置も異なる。横梁は中央部と合わせて３か所存在する。

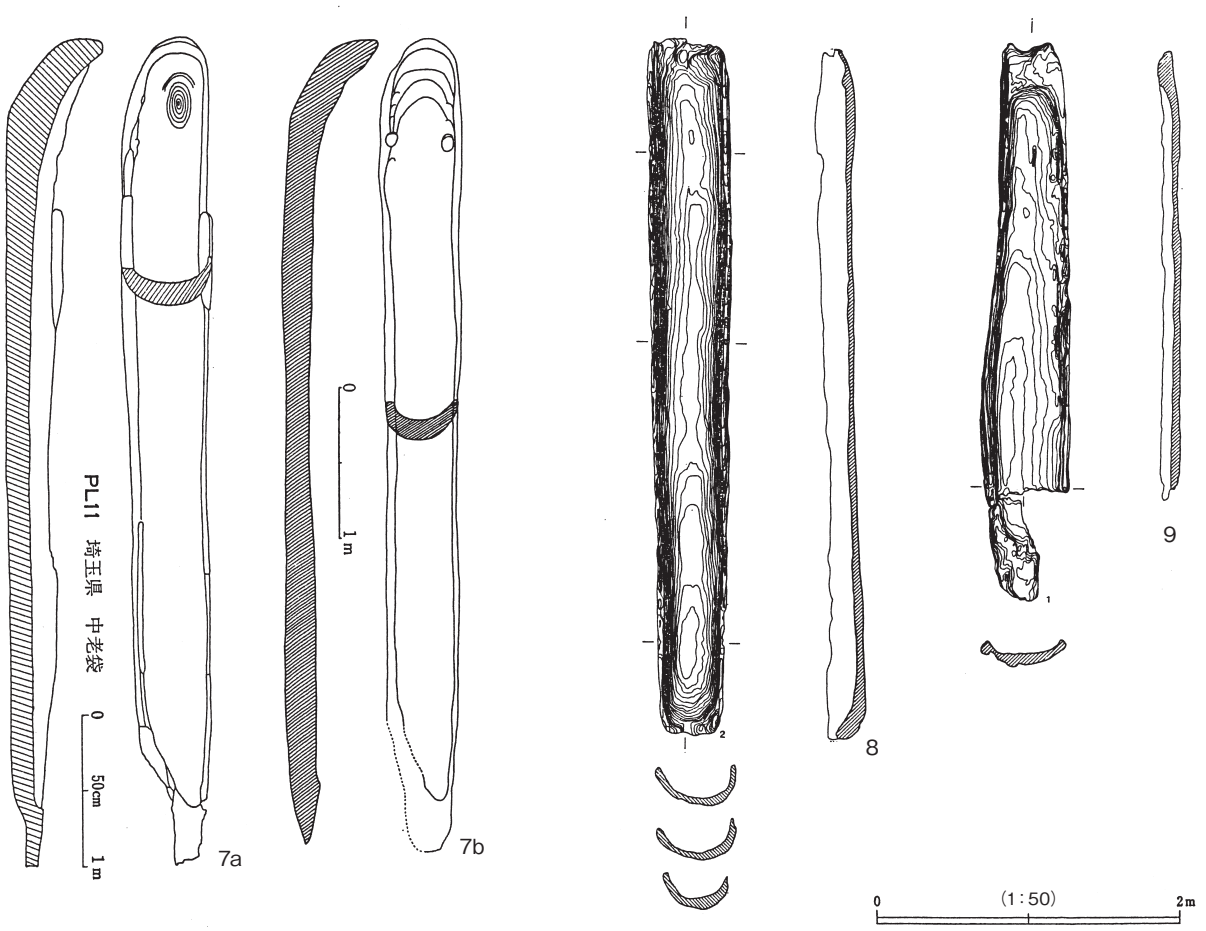


図７　出土丸木舟２（埼玉県２）

本例には伴出遺物も周辺遺跡もなく、舟体の特徴から縄文時代後期以降と考えられてきたが、平成13年度に年代測定の結果、縄文時代前期に相当することが判明した[2)]。材質はカヤと推定されている[3)]。ただ、縄文時代丸木舟の古い段階の舟形としてはかなり異質であり、扱いには慎重を要するであろう。

４．川越市中老袋（老袋）出土地点（蓮沼遺跡）（図７－７a：清水1975，７b：川越市総務部市史編纂室1972）

入間川流域の川越市中老袋に所在する。昭和27年（1952年）に台風の影響で入間大橋付近の川底の粘土層から発見された。舟尾とされる側の先端部と舷側が欠損しているが、参考例として取り上げる。出典により実測図の表現が異なるので両者を示した。７aは清水氏文献（清水1975）、７bは川越市史（川越市総務部市史編纂室1972）の実測図である。現存長5.49m、幅54～60cmである。深さは最大で35cmである。舟底の厚さは、清水氏文献によると14～20cmとみられるが、市史では「30cmもある」ことから未成品の可能性を指摘している。いずれにしても他の出土例と比較して厚底である。

平面形は鰹節形もしくは折衷形とされる。現存する舟首の形状は丸みを帯びたU字形を呈する。横断面は半円形で、縦断面形では舟首がゴンドラ状に高く反り上がっている。舟首には原木の芯と年輪が観察されることから、横断面形は半円形であっても木取りは半円特殊形に分類される。舟首には炭化した部分がある。

出土地周辺の沖積微高地で縄文時代後期の土器片が採集されていることから、本例の時期も後期と推定

されている。材質はカヤである。清水氏は本例を中老袋形として、鰹節形のなかの一類型（２Ｃ式）とした。

５．北足立郡伊奈町伊奈氏屋敷跡（図７－８、９：青木ほか1984）

綾瀬川流域の北足立郡伊奈町小室に所在する。東北・上越新幹線建設に伴って昭和56年（1981年）に埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が行われた。低湿地調査区で、遺物を含む泥炭層から遺存状況の良い丸木舟が２隻と櫂が１本出土している。

８はほぼ完形に近く、全長4.85m、幅45～55cm、厚さ５cmである。深さは20cmある。先端部の形状は方形に近く、箱形としておきたい。舟体の幅が均等ではなく、図の上方が太くて下方がやや細く、10cmの差がある。横断面は半円形ないし半円特殊形か。縦断面形にはわずかな違いがある。図の上方側は舟底を薄く仕上げてあるのに対し、他方の先端部は厚い作りになっている。両端部とも舟底外面が立ち上がっているが、立ち上がりの角度にも微妙な違いがある。材質はカヤである。下部の舟底に炭化した部分が認められる。

９も先端部の一部が欠損しているが完形に近い。全長3.7m、幅45～60cm、厚さ５cmである。深さは８cmで、８よりも浅い。平面形は鰹節形ないしは折衷形か。片側の先端部（図上方）はU字形ないし方形の可能性もある。他方は欠損が大きいがU字形とみられる。７と同じく舟体幅に違いがあり、中央部と欠損先端部の中間に最大幅がある。横断面形は半円形で、縦断面形では舟底先端部の立ち上がりはわずかである。材質はケヤキである。

８、９とも時期は、出土土器から縄文時代後期末から晩期前葉と考えられる。

【千葉県】

６．松戸市横須賀出土地点（図８－10：松下1982）

坂川流域の松戸市横須賀に所在する。昭和33年（1958年）に水田改良のための暗渠排水工事中に発見された。泥炭層の下方に堆積する粘土層の直上から正位の状態で出土したらしい。10は全長5.57m、幅45cmで、舟体中央部付近に欠損があるが、両端部は残っている。舟底の厚さは６cm程度、深さは現状で10cm程度か。

平面形は典型的な鰹節形で、横断面形は半円形である。縦断面から、やや幅の広い方の先端部（図上方）は厚みがあり、舟底外面が立ち上がっている。平面形は尖ったV字形を呈している。こちらを舟首とした場合、舟尾側の平面形はU字形で、舟底の立ち上がりはわずかである。また、先端から50cmほどの舟底中央に穿孔がある。舟首と舟尾には炭化した部分が認められる。

材質はカヤとみられ、時期は縄文時代後期と推定されている。

７．市川市雷下遺跡（図８－11：服部・太田ほか2019）

国分川流域の市川市国分７丁目に所在する。東京外かく環状道路の建設に伴い、千葉県教育振興財団が発掘調査を行なった。平成13年度からの確認調査を経て、平成25年度の本調査で縄文時代早期の丸木舟や櫂が出土している。丸木舟は砂礫層２と呼んでいる暗褐色シルト質土層から正位の状態で出土した。片方の先端部（図上方）に接するように自然木が検出され、舟体と自然木の間から縄文時代早期条痕文系土器の尖底部が出土した。

11は全長7.04m、最大幅53cm、厚さ6.8cmである。舷側をほとんど失っており、深さは現状で約10cmである。

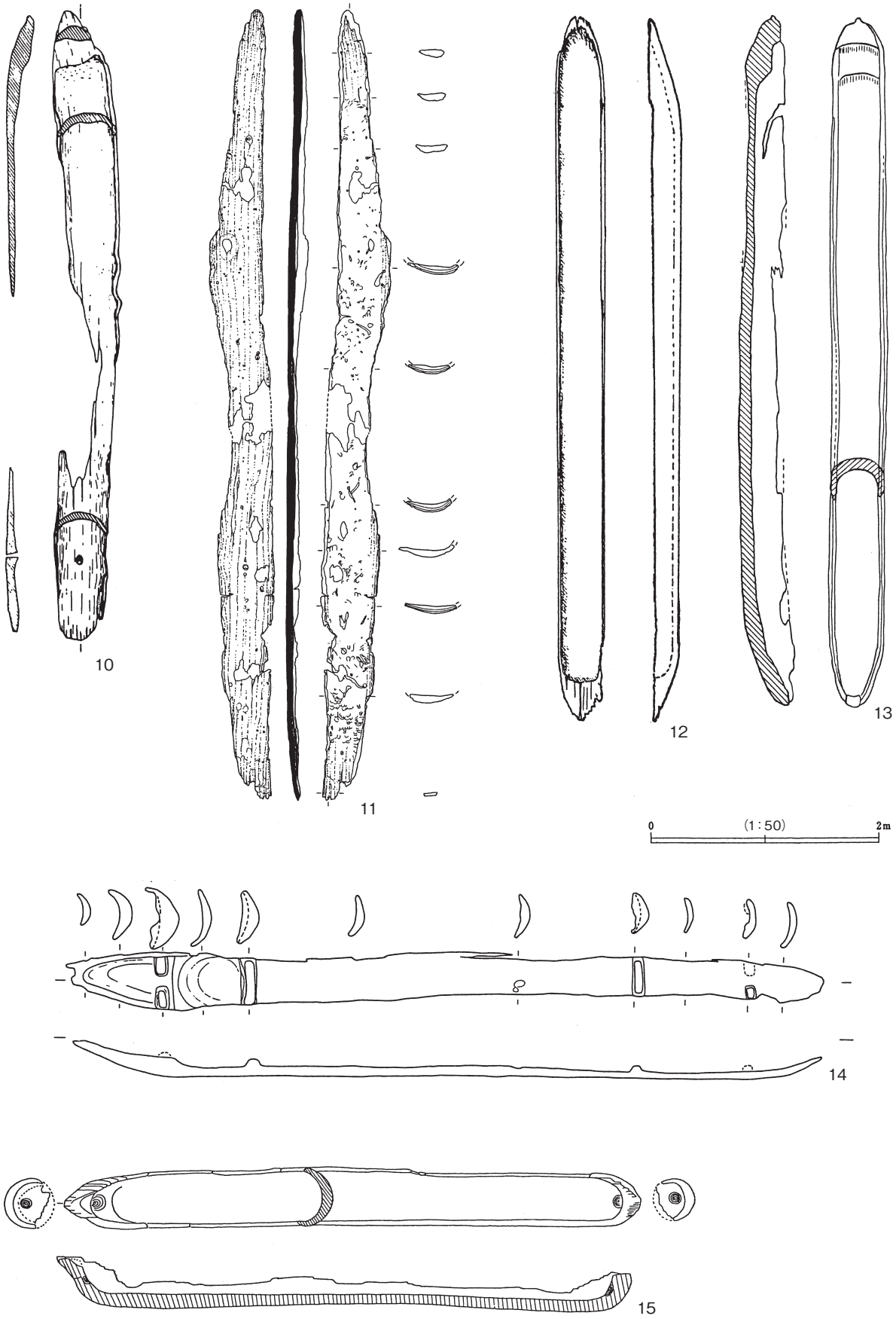


図８　出土丸木舟３（千葉県）

平面形は鰹節形で、断面形は半円形である。

両端部とも先の尖ったＶ字形をしており、長軸の断面には緩やかな立ち上がりが認められる。一見すると舟首と舟尾の区別がつかないが、先端部の仕上がりにはわずかな違いがみられ、横断面形にも反映されている。図上部の先端部は厚みのある作りで、舟体内部に舟底との境界を示す工具痕跡が現地で観察された（沖松2014）。この境界より先の先端部は粗い仕上がりであるのに比べ、他方の先端部は板状に近い作りである。舟体の幅にも微妙な違いがあり自然木側の先端部がより細い傾向がある。主に舟体内部に炭化した部分が散見される。

材質はムクノキで、出土層位や^{14}Ｃ年代測定の結果から時期は縄文時代早期後葉である。島根大学構内遺跡出土例よりも古く、現状では国内最古例である。砂礫層２のさらに下層の基底部から早期の波蝕崖が検出され、舟体にアナジャコ類の生痕化石が認められることから、本例は海浜で使用されていたことが明らかである。

８．千葉市落合遺跡（検見川泥炭層遺跡・畑町出土地点）（図８－12：石井1957，13：清水1975）

花見川流域の千葉市花見川区畑町に所在する。昭和22年（1947年）、代用燃料としての泥炭の採掘作業中に丸木舟１隻（第１号）が発見された。翌年、慶応義塾大学・東洋大学・日本考古学研究所の３者共同で発掘調査が実施され、丸木舟２隻（第２号・３号）が泥炭層から出土した。縄文土器は伴出していないが、櫂が複数出土している。中には装飾のあるものを含んでいた。また、共伴したハスの種子が発芽して「大賀ハス」として知られている。

12（第１号）は石井氏文献（石井1957）より、全長6.2m、幅43cm、深さ28cmである。平面形は鰹節形で、両端部が尖ったＶ字形をしている。縦断面形には違いがある。片側は舟底が緩やかに立ち上がり先端部が厚みを持っているのに対し、他方の先端部は厚みを変えずに若干高く立ち上がる。

13（第２号・慶応義塾大学保管）は全長5.8m、幅48cm、深さ44cmである。平面形は鰹節形だが、先端部形状は片側がやや丸みを帯びていて、他方は12と同様である。縦断面形は11と似た形状を示し、厚みのある先端部はテラス状になっている。こちらが舟首とみられ、先端に突起がある。横断面は半円形もしくは半円特殊形か。

当遺跡出土丸木舟の帰属時期については、松本信廣氏が南房総市加茂遺跡報告（松本ほか1952）の中で、櫂の特徴を比較して後期と推定していた（松本1952）が、1950年頃[4)]の^{14}Ｃ年代測定（石井1957、渡辺1966）で、縄文時代後期から晩期であることが検証された。12、13とも材質はカヤである。

９．八千代市大江間遺跡（保科出土地点）（図８－14：八千代市史編さん委員1991）

新川が印旛沼と合流する付近の八千代市保科に所在する。昭和25年（1950年）に印旛沼干拓工事で発見され、翌年に早稲田大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。丸木舟は地表下1.6mの泥炭層から出土した。周辺の同一層から縄文時代晩期の土器片が出土している。

14は全長6.54m、幅30～40cm、厚さ約5～10cmである。平面形は鰹節形で、両端部とも尖ったＶ字形の先端部を持つ。図左方が舟首とされる。木取りは半円形とみられる。縦断面形から見ると舟底外面が両端部とも立ち上がっている。舟首とされる側は舟尾に比べて厚みのある作りで、舟底から一段高くなっている。その状況は横断面図にもよく反映されている。舟体内部には刳り残し（横梁）が４か所設けられてい

る。４つの横梁のうち、両端部側にある２つは中央部が連結していない特異な形状をしている。舟首側の横梁間には弧状に削り取られた部分があり、炭化した部分がみられる。

材質はカヤで、周辺の出土土器から時期は縄文時代晩期の安行３ｃ式と考えられている。

10. 香取郡多古町ゴーブケ沼出土地点（図８－15：清水1975）

栗山川支流の借当川流域の香取郡多古町南中に所在する。昭和32年（1957年）に借当川の新河道の川底から偶然発見された。九十九里平野の北部で太平洋に注ぐ栗山川流域は、丸木舟の出土量が全国で最も多い千葉県のなかでも、旧椿海沿岸と並んで特に出土地点の集中する地域である。

15は全長5.13m、幅50cm、深さ25cmである。舟底の厚さは10cm程度か。平面形は鰹節形で、縦断面形では舟底からの立ち上がりが両端部とも深いが、平面形・縦断面形にはわずかな違いが見られる。一方の先端部は尖った形状のＶ字形で、他方は丸みを帯びたＵ字形である。Ｖ字形先端部を舟首とすれば、舟首は舟尾より舟底の立ち上がりが高く、縦断面形でも曲線を組み合わせたカーブを描く。舟尾の立ち上がりは単純な曲線である。立ち上がりの角度はどちらも垂直ないし急傾斜と言えよう。両端部に芯を残していることから、木取りは半円特殊形である。清水氏は埼玉県中老袋出土例（７ａ・７ｂ）との共通点を指摘している。

時期と材質に関して、千葉県史の集成（鈴木・山岸2004）では、時期は縄文時代後期の所属で、材質はクリとしている。

11. 香取郡多古町島Ｂ地点（図９－16：辻・柿沼・田川1977）

栗山川流域の多古町島に所在する。昭和50年（1975年）に栗山川の川岸で露出している丸木舟の舟首とみられる部分が発見され、千葉県教育庁の依頼で日本文化財研究所が発掘調査を行なった。舟体は、泥炭質砂層の最上部から正位の状態で出土した。舟内にはヒシの種実が密集していた。花粉分析により、当時の環境は淡水化した湖沼であったと推定される。

16は全長4.82m、幅50cmである。深さは11～15cmで、舟底の厚みは中央部で８cmを測る。平面形は鰹節型だが、先端形状には違いが見られる。一方（図下方）は尖ったＶ字形で、他方はＵ字形ないし方形に近い。こちらが露出していた先端部で、舟首とされる。縦断面形では、舟尾側は厚みを持っており、舟底がやや高く立ち上がる。舟首側の立ち上がりは緩やかである。横断面形から、木取りは半円形を示す。先端部に近いところにそれぞれ横梁があり、舟首側の横梁は舟底との境界になっている。

材質はカヤで、出土層の^{14}Ｃ年代測定の結果から、縄文時代後期の所属とされる。

12. 香取郡多古町栗山川流域遺跡群七升地点（広川遺跡）（図９－17：村山1999）

栗山川流域の多古町島字七升に所在する[5)]。圃場整備事業に伴い、香取郡市文化財センターが発掘調査を実施した。平成６年度の確認調査で丸木舟を１隻検出したことを受け、平成７年度に本調査を実施している。

出土地点は、島地区の台地突端からほぼ真東の方向に位置する第３調査区である。舟体は地表下1.2mで、粘土質の暗青灰色土層から正位の状態で検出された。栗山川の流路方向に対して直交する向きで出土しており、河川に向いた先端部が舟首とされる。舟首側の舟底に砂泥ブロックが２個検出された。

17は全長7.45m、幅64～75cmである。部分的な欠損はみられるが、遺存状態は良く完形に近い。深さは最も残りの良い部分で30cmを測る。舟底の厚さは10cmである。平面形は鰹節形で、先端部は丸みを帯びたU字形で、両端部の形状はほとんど同じと言える。河川の流路に向いた側を舟首とすれば、舟尾に向かって幅が狭くなる傾向がある。横断面形はおよそ半円形であるが、なかには舟底外面が直線的な部分もあり、やや複雑な様相を呈する。木取りは概ね半円形とみられるが、凹形に近い様相を呈する部分もある。

本例の帰属時期については、確認調査の段階では周辺の出土土器から縄文時代中期と考えられてきたが、報告書刊行後に^{14}C年代測定の結果が示され、縄文時代前期であることが判明した（財団法人香取郡市文化財センター1999）。材質はムクノキである。

13. 香取郡多古町南玉造遺跡（図９－18：西山1981）

栗山川流域の多古町南玉造に所在する。昭和53年（1978年）に栗山川河川敷で放置された状態で発見された。出土経緯は明らかではないが、河川改修工事の影響で露出したものと考えられる。

18は全長4.41m、幅88cmで、舟底の厚さは20～22cmと分厚い印象がある。平面形は鰹節型だが、先端形状にはわずかな違いが見られる。報告では尖っている方を舟首、方形に近い方を舟尾としている。縦断面形では船首側が高く立ち上がっている。舷側の大半は失われているが、舟首側で28cm、舟尾側で18cmの深さがある。

材質はカヤで、明確な所属時期は明らかでないが、縄文時代後期と推定されている。

14. 香取郡多古町栗山川流域遺跡群九蔵地点（図10－20：戸村2009）

栗山川流域の多古町多古字九蔵に所在する。平成19年（2007年）、店舗建設に伴い多古町教育委員会が発掘調査を実施した。丸木舟は地表下約1.8mの７層（暗褐色粘土ないしシルト層）から、ほぼ水平に正位の状態で出土した。

舟底との間に横梁状の区画を持つ先端部（図下方）が、栗山川の流路方向に向いている。報告（戸村2009）ではこちら側を舟尾とし、反対側を舟首としている。確認調査の際に舟尾側に近い部分が一部損傷を受けたが、ほぼ完形と言えるほどの遺存状況である。

20は全長6.51m、最大幅57cmで、舷側の残りも良く、深さは最大で25cmである。舟体の厚さは舟底で３～７cm、舟縁で２～６cmを測る。

平面形は鰹節形の部類に入るが、丸みを帯びた方形に近い両端部が、突起状に突出する特異な形態をしている。縦断面形では、舟首で舟底が緩やかに立ち上がり、舟尾は舟底から段差を設けて一段高く作られている。舟底との境界には横梁状の削り出しがある。また、両端部の舟底外面に「イルカの頭部」のような膨らみがあるのも特徴である。横断面形では舟縁より下部に最大幅を持つ傾向があることから、木取りは半円特殊型か。舟体の内外表面に炭化した部分がある。

^{14}C年代測定の結果と周辺出土土器から、縄文時代後期とされる。材質はカヤである。

15. 匝瑳市下沼出土地点（図９－19：桜井1995・元出典 桜井1956）

匝瑳市（旧八日市場市旧新田）の通称下沼に所在する。九十九里平野の北部に位置する旧八日市場市内は、丸木舟の宝庫とも言われるほどで、周辺の多古町・横芝光町などと共に丸木舟の出土地が集中する地

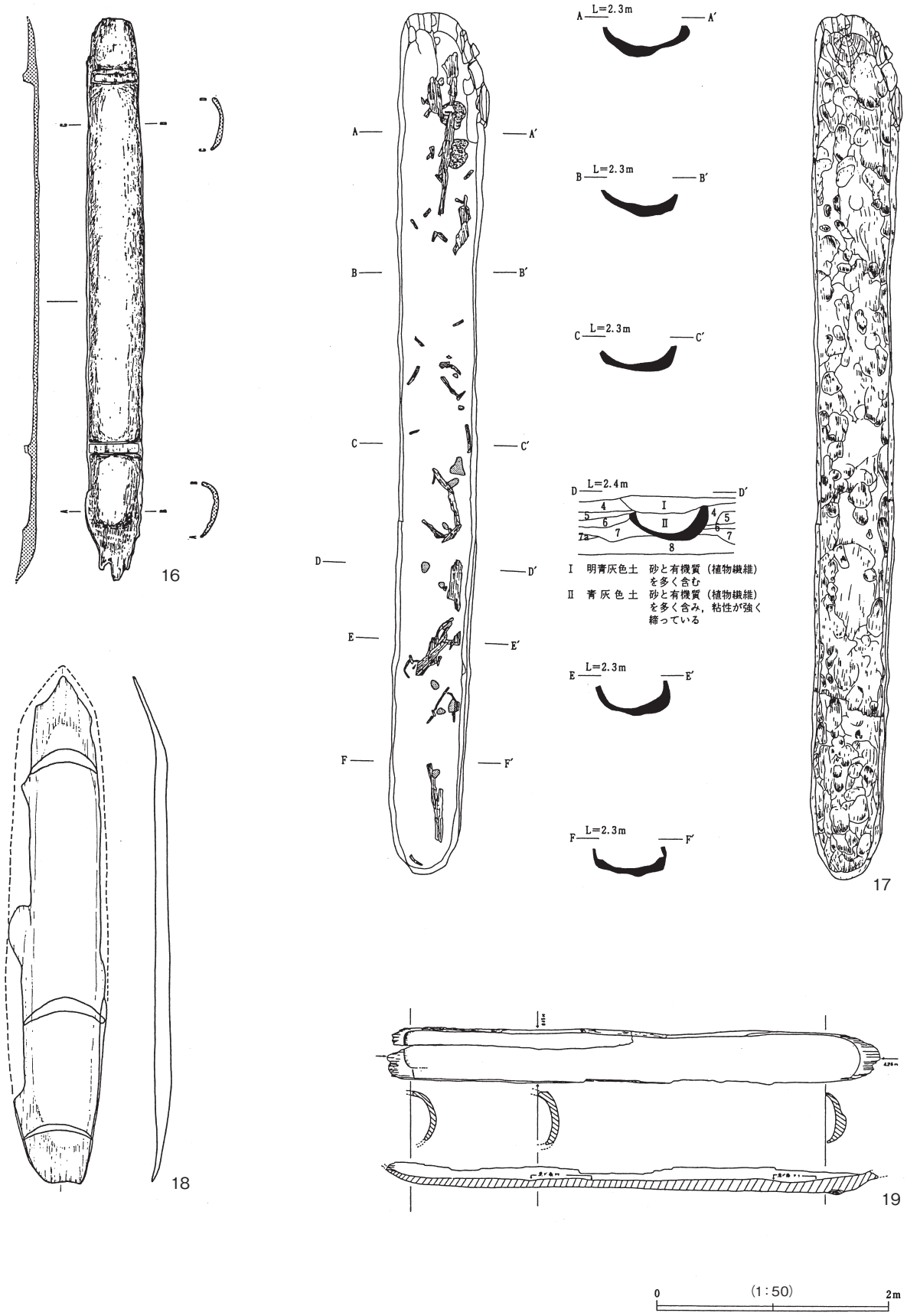


図9 出土丸木舟4（千葉県2）

域である。

JR総武本線八日市場駅の南側に広がるかつての沼地地帯は下沼と呼ばれている。水田堀で丸木舟の一部が発見されたことを受けて、昭和30年（1955年）に慶応義塾大学・旧八日市場市による発掘調査が行われた。舟体は泥炭層中から出土した。

なお、個別の遺跡ごとには言及しないが、周辺一帯では櫂も複数出土している。

19は全長4.25m、幅43㎝で、先端部や舷側が一部欠損しているが完形に近い。舟底が厚く、厚さは不均一である。平面形は鰹節型だが、先端形状にはわずかな違いが見られる。一方はやや尖ったU字型で、他方は方形に近い形状をしている。U字型の先端部を舟首とした場合、縦断面形は舟首側が肉厚で、舟底外面が舟尾側よりも高く立ち上がる傾向がある。横断面形から木取りは半円型とみられる。

材質はカヤで、時期は縄文時代後期と推定されている。

16. 匝瑳市多古田低地遺跡（図10－21：中山・喜多2020）

太平洋に面した旧椿海沿岸の匝瑳市（旧八日市場市）飯塚（豊和地区）に所在する。遺跡発見の契機は、昭和37年（1962年）に暗渠排水整備の際に泥炭層から縄文時代晩期の遺物が発見されたことによる。慶応義塾大学の緊急調査の際には丸木舟の破片が出土している（八日市場市史編さん委員会1982）。

平成24年度から平成27年度までに、圃場整備事業に伴う確認調査と本調査が行われた。発掘調査全体を通じて、丸木舟は破片を含めて17点出土している。財団法人印旛郡市文化財センターによる本調査で出土した、最も遺存状況の良い個体１隻（21）を図示する。21は暗褐色泥炭層から正位の状態で出土した。周辺には加曽利Ｂ式土器が多数出土し、舟体内部にも土器片が検出された。慶応義塾大学の調査も含めて、櫂が多数出土している。

21は全長6.27m、最大幅66.9㎝で、厚さは2.3～6.6㎝を測る。先端部は両端部とも完存はしておらず舷側の大部分を欠損しているが、全容を復元できる遺存状況である。平面形は概ね鰹節形で、両端部の形状には違いがある。図上方の先端部は幅が先端にいくほど狭くなり、Ｖ字形ないし幅の狭いU字形を呈するとみられる。こちらを舟首とした場合、舟尾は丸みを帯びたU字形とみられる。

縦断面形の詳細は報告には示されていないが、舟首側の舟底内部は急角度で立ち上がるのに対し、舟尾側は緩やかな立ち上がりである。横断面形も全体の詳細が不明であるが、概ね半円形の木取りと考えられる。舟体内面が広範囲に炭化している。

本例の時期は、伴出した加曽利Ｂ式土器の年代観と^{14}Ｃ年代測定法及び酸素同位体年輪年代法の測定結果（約4,000～3,800年前）が一致することから、縄文時代後期中葉である。材質はカヤである。

17. 匝瑳市米倉長割（長割堀）出土地点（図10－22：清水1975）

下沼出土例（図９－19）と同じく、九十九里平野の下沼と呼ばれる水田地帯で、昭和34年（1959年）に地元住民により発見された。千葉県史集成（鈴木・山岸2004）の「米倉長割（1）」地点に相当すると考えられる。

22は全長4.2m、幅45㎝で、両端部の先端を少し欠損しているが、かなり完形に近い。横梁を３か所に有する。平面形は鰹節型で、片方の先端部（図下方）はU字形を呈していたと推定される。他方は元の形状が不明である。縦断面形では舟底外面の立ち上がりにわずかな違いがみられる。形状不明の先端部側が

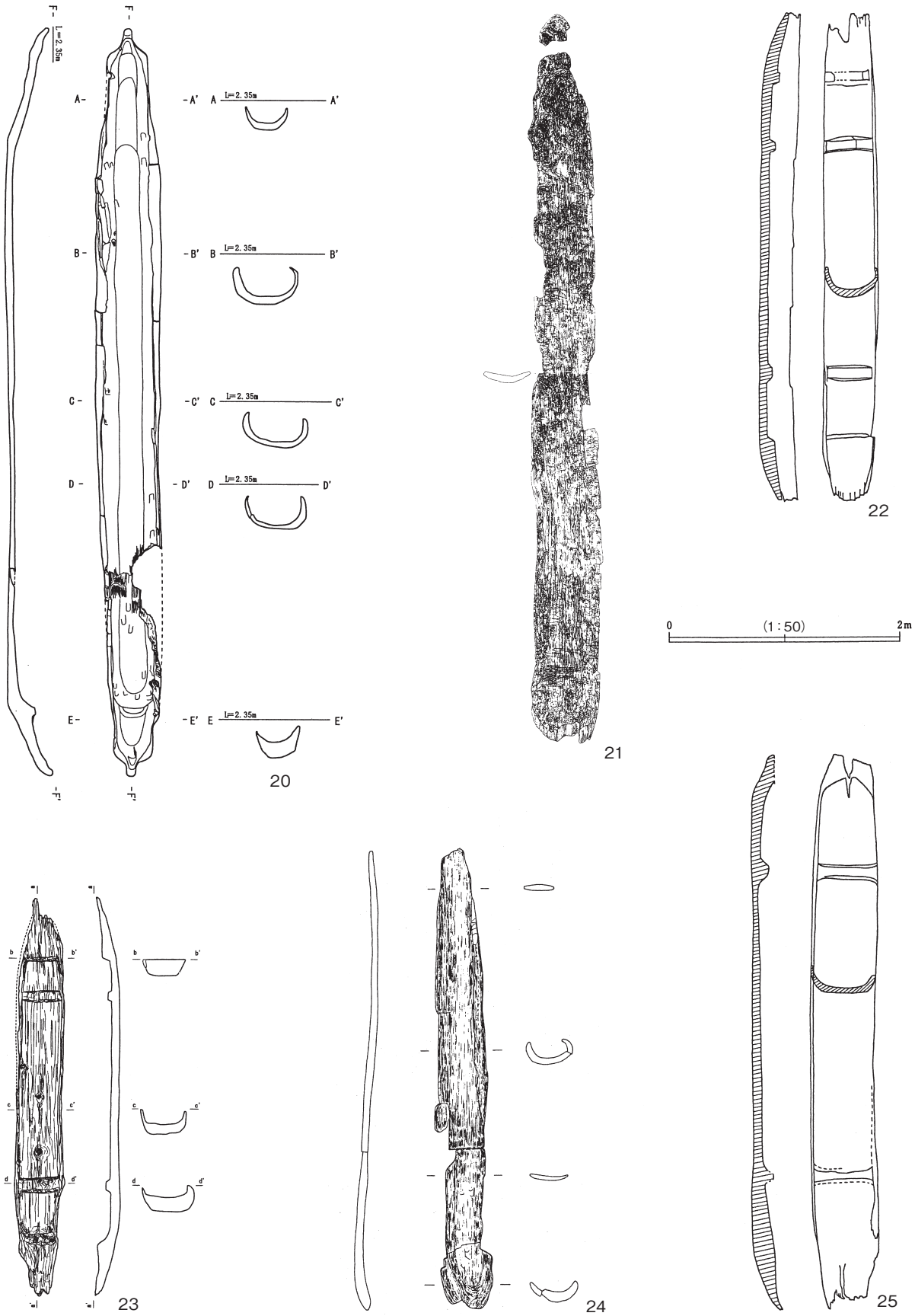


図10　出土丸木舟５（千葉県３）

他方より高く反りあがる傾向があり、舟底と先端部を横梁で区画している。U字型の先端部は舟底との間に段差を設けるのみである。横断面形から木取りは半円形である。

清水氏文献（清水1975）には時期と材質についての明確な記載はないが、川崎氏文献（川崎1991）において縄文時代晩期と紹介され、小林氏文献（小林2015）では材質がカヤとされている。

18. 匝瑳市米倉長割（大境）出土地点（図10－23：小林2015）

匝瑳市米倉長割に所在する。米倉長割は大境の俗称とされる。1955年（昭和30年）頃に農作業中に偶然発見され、慶応義塾大学に引き取られた。八日市場市史（八日市場市史編さん委員会1982）で米倉長割丸木舟出土地として示された６地点のうち、Ｅ地点に相当するとみられる。

23は全長3.42m、最大幅44cmで、２か所の横梁を持つ。先端部に欠損はあるが、ほぼ完形に近い。平面形は両端部がＶ字形に尖る鰹節形で、縦断面形から見ても、両端部の形状にほとんど違いが認められない。周辺の事例に比べて小型である。横断面形は非常に特徴的で、半円形の特徴を残しながらも、凹形のような断面を示す。

国立歴史民俗博物館の平成17年（2005年）度企画展を契機に行われた^{14}Ｃ年代測定の結果、本例の所属時期は縄文時代晩期安行３ａ式か安行３ｂ式に相当すると考えられる。材質はクリである。

19. 匝瑳市宮田下泥炭遺跡（図10－24：田川・中西ほか1985）

栗山川支流の借当川流域にあたる旧八日市場市吉田字宮田下地先に所在する。昭和59年（1984年）に借当川河川敷に丸木舟が露出していることが確認された。対岸で河川改良工事の計画もあったため、記録保存のために借当川遺跡調査会によって翌年に発掘調査が実施された。

舟体の一部が川岸に露出しており、その舟体を挟み込むように木杭列が検出された。丸木舟は川に突き出た舟体と、先端部の残った舟体の二つに折れている。第Ⅳ層黒色泥炭層から、ほぼ水平の正位の状態で出土した。

24は折れた舟体を復元した状態を示している。現存長3.99m、幅43cm、深さ９cm、厚さ９cmである。露出していた先端部の形状は不明であるが、平面形は概ね鰹節型と言える。遺存している先端部は板状の舷側が舟底を囲うような形状をしており、他の鰹節形とは異なる印象を与える。横断面形では舷側の残りがよく、舟縁より下部に最大幅を持つことから、木取りは半円特殊型か。縦断面形には本来の形状が反映されていない。

舟底内部に密着して加曽利Ｂ式の完形土器が出土したことから、時期は縄文時代後期とされる。材質はクリである。

20. 匝瑳市残し沼（残シ沼）出土地点（図10－25：清水1975）

大境出土例ほかと同じく、下沼と呼ばれる水田地帯の旧八日市場市米倉大境に所在する。大正６年（1917年）の旱魃で沼が枯れあがった際に地元住民が発見し、自宅前の残し沼に置いていたことから残し沼出土の舟と認識されるようになった。後に早稲田大学西村眞次氏が論文で取り上げたことで、縄文時代丸木舟研究の発端となった。舟体は水面下1.5mのケトウ土のなかにあったという。

25は全長4.84m、幅55cmである。両端部の一部を欠損している。平面形は鰹節型とみられるが、先端部

の詳細な形状は不明である。それぞれの先端部に近いところに横梁がある。縦断面形では先端部にわずかな違いが認められる。図下方の先端部は他方に比べて厚みを有しており、舟底が内外面とも緩やかに立ち上がる。横梁が舟底との境界となっているが、他方の先端部では横梁の外側にも平坦面が続いている。舷側の残りは不良であるが、横断面形には特徴がある。底面が平坦で角張っていることから、木取りは凹形に近い。

時期については、近年、東京大学総合研究博物館で^{14}C年代測定が行われて縄文時代後期であることが明らかになった（西秋2024）。材質はカヤである。

21. 大網白里市駒込出土地点（図11－26：大網白里町史編さん委員会1985）

九十九里平野を流れる小中川流域の大網白里市（旧大網白里町）駒込に所在する。昭和46年（1971年）、JR（当時国鉄）大網駅の移転工事中に、水田の地下２ｍの泥炭層から偶然発見された。直立状態での出土であったという。大網白里町史（大網白里町史編さん委員会1985）では弥生時代の所属と推定されているが、縄文時代の可能性もあるため取り上げる。

26は全長4.3m、幅55cmで、欠損した部分はあるがほぼ原形をとどめている。実測図からは深さ22～23cm、厚さ10cmと読み取れる。平面形は鰹節型だが、これまで見てきたタイプとはかなり印象が違う。その違いは縦断面形に見られる先端部の形状にあり、直立するように舟底外面が立ち上がっている。ゴンドラ状の形状とも異なるこの形態は、川崎氏文献（川崎1991）で取り上げた種子島のマルキブネの舟首に似ている。種子島例は折衷型の平面形だが、本事例は両端部ともＵ字型の先端部で同じ形をしている。ただし一方には舟底から一段高くなったテラスを設けている。横断面形は舟底外面が平坦で、木取りは凹形である。

時期については弥生時代と言われてきたが、大網白里市のホームページでは縄文時代から古墳時代と幅を持たせている。材質はクスノキである。

22. 南房総市（旧安房郡丸山町）加茂遺跡（図11－27：清水1975・元出典 松本1952）

東京湾に面した南房総市（旧安房郡丸山町、旧安房郡豊田村）加茂に所在する。遺跡発見の契機は、戦前に地元農家の角田氏が自宅の掘削で土器・石器などと共に丸木舟らしき木製品を発見したことによる。その後戦後になって昭和23年（1948年）、慶応義塾大学が発掘調査をした。本例以前の出土丸木舟は偶然の発見に伴う緊急調査だったが、本例は伴出遺物から時期を特定できた初の計画的な発掘調査例と言えよう。片方の先端部しか検出されていないが、数少ない形態の類型であるため取り上げる。櫂も出土している。

舟体は第二泥炭層から第二青色粘土層にかけて、倒位の状態で検出された。遺存状況は不良であったが、全長4.8m、現存幅60cmの舟体に復元された。平面形は割竹形とされる。先端形状は方形で２つの貫通孔を持つ。断面形では板状なので、鰹節形への過渡的な形態とする見方もある。

周辺出土土器から縄文時代前期諸磯式の時期と考えられる。材質はムクノキである。

【東京都】

23. 北区中里遺跡（図11－28：中島ほか2018）

東京低地西側の隅田川（旧荒川）流域にあたる、東京都北区上中里二丁目に所在する。国史跡の中里貝塚を包括する。東北新幹線建設工事に伴って昭和58年（1983年）から翌年に中里遺跡調査会によって発掘

調査が行われた。

武蔵野台地北東部の本郷台直下に連なる長大な調査区の東側には、田端微高地が存在する。丸木舟はこの微高地上にあたるＰ地区の砂層（Ｂ$_2$層）中から出土した。

28は全長5.79m、最大幅72cmである。舟底までの深さは最大で42cmあり、他遺跡の出土例と比較しても深い。舟体の厚さは舟底部で５cmを測る。図下方の先端部には芯が残っている。他方は先端部と舟体上部が欠損しているものの、全体としては保存状態が良好である。平面形は鰹節型で、Ｖ字状に尖る先端部形状を持つ。横断面形をみると、芯のある先端側では舷側が良好に残っており、木取りは上端部がオーバーハングする半円特殊形を示している。概ね両端部の形状に違いは認められないと考えられているが、舟底の縦断面は異なる印象がある。芯の残る先端部の舷側には、左右に対となる切り込みがある。

出土した砂層は五領ヶ台式土器を包含しているので、丸木舟の時期は縄文時代中期初頭と推定されている。材質はムクノキである。調査区の別地点では縄文海進時に形成された波食崖が検出されていることから、本例は海浜に近い環境で使用されていたと考えられる。

【神奈川県】

24. 横須賀市伝福寺裏遺跡（図11－30：横須賀市教育委員会1988）

三浦半島東南部の久里浜湾に面した横須賀市久里浜９丁目に所在する。清掃工場建設に関連する工事に伴って、横須賀市教育委員会が昭和56年・57年（1981年・1982年）に発掘調査を実施した。植物性遺物を多く含む黄褐色砂層（Ⅲ層）から丸木舟が１隻出土した。鋼矢板で切断されるなど舟体の破損や欠損が多いが、全容を復元できる遺存状況と言えるだろう。同様に植物性遺物を含むⅣ層（暗灰色砂層）には縄文時代中期初頭の十三菩提式・五領ヶ台式土器が含まれる。

30は現存長3.04m、残存最大幅37.5cm、厚さ４cmを測る。平面形は鰹節形と考えられ、先端部の形状は丸みを帯びたＵ字形と言えよう。両端部ともに平面形状に違いはないとみられるが、縦断面形では図下方の先端部が他方に比べて極端に厚みを持っている。舟底外面の立ち上がり角度には大きな差はないようである。

海浜での使用が想定される出土例の中では最も小型である。

本例の時期は縄文時代中期初頭とされる。材質はムクノキである。

【新潟県】

25. 新発田市青田遺跡（図11－29:荒川ほか2004）

日本海に注ぐ落堀川流域の旧潟湖（紫雲寺潟）にあたる、新発田市（旧北蒲原郡加治川村）大字金塚字青田に所在する。日本海沿岸東北自動車道建設に伴って、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。平成９年（1997年）度からの一次調査を経て、平成11年（1999年）年度から平成13年（2001年）度まで本格的な二次調査を行なった。丸木舟は旧河道左岸の斜面部から川底にかけて、舟体が前後左右に傾いた正位の状態で出土した。櫂も複数出土している。

29は斜面側にあった先端部（図下方）が欠損しているが、ほぼ全形の分かる遺存状況である。現存長5.47m、最大幅75cmを測る。深さは最大で14.5cm、舟底の厚さは最も薄い部分で約３cmである。川底に向いた側の先端部を舟首とした場合、舟首に近いところに横梁状の削り出しがあり、舟底との境界になって

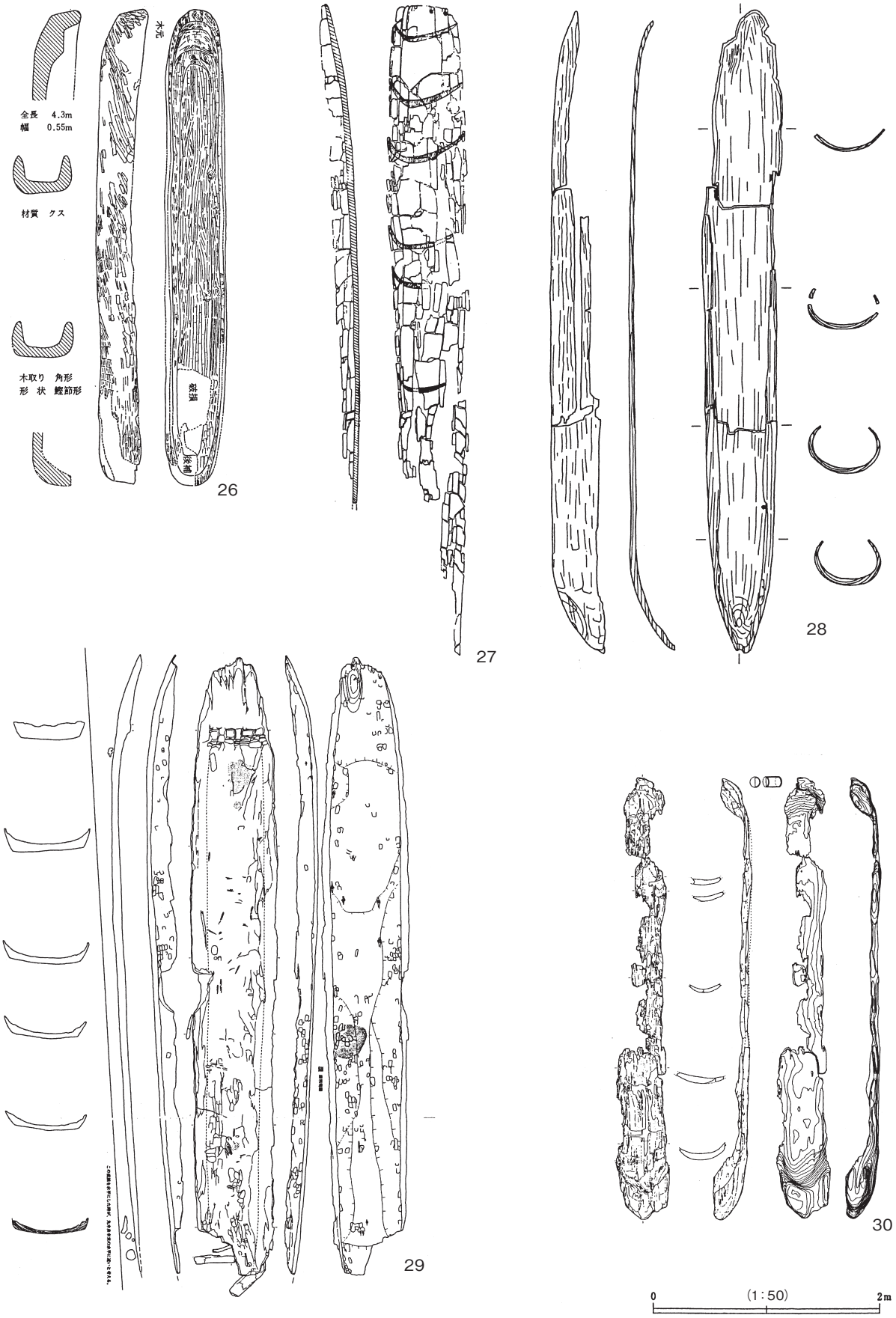


図11 出土丸木舟６（千葉県，東京都，神奈川県，新潟県）

いる。削り出しは、表面におよそ10cm四方の立方体が３か所配置される複雑な構造を持つ。

平面形は鰹節型で、長軸方向の断面は舟首に向かって緩やかに舟底外面が立ち上がり、舟尾側も同様と推定される。横断面形には特徴があり、舟底外面が平坦にカットされ、舷側も舟底に対して直線的に立ち上がるようにカットされている。そのため舟底外面と舷側の間には明瞭な稜線が生じる。清水分類の凹型とは異なる、荒川分類Ｅ類の木取りである（荒川2021）。

時期は縄文時代晩期末葉とされ、同一層準に含まれる掘立柱建物の柱根部の年代測定（ウイグルマッチング法）結果とも一致する。材質はトチノキである。なお、本例に近接して出土した柱根は艫綱を結ぶ杭であった可能性が指摘されている。

【静岡県】

26. 静岡市神明原・元宮川遺跡（図12－31：財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所1987）

大谷川流域の静岡市駿河区宮川ほかに所在する。河川改修事業に伴い、昭和58（1983）年度～60（1985）年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。本遺跡は著名な登呂遺跡の周辺にあり、遺跡の主体は弥生時代から奈良・平安時代である。最南端の大谷２区で砂丘下の粘土層から丸木舟が出土した。舟底には大型の礫が２点検出された。

31は全長6.7m、最大幅65cm、深さ10cm、厚さ2～10cmである。片方の先端部が欠損し、舟体は中央で鋼矢板により断裂しているが、かろうじて全体形状がうかがえる。ただし長軸方向は土圧で潰れていて縦断面には本来の形状が観察できない。平面形は鰹節型で、両端部ともＶ字状に細くなっているとみられ、形状の違いは特にないと想定される。舟底の厚さは約２cmと非常に薄い作りになっている。横断面形は半円形の木取りか判然としない。数か所で単なる湾曲線ではない部分があり、緩やかな山形に面取りしていた可能性もある。

本例の所属時期については、当初は弥生時代と考えられていたが、本報告で縄文時代晩期と位置づけている。材質は、辻尾榮一氏の集成（辻尾2000）によるとクスノキとされる。

【岐阜県】

27. 揖斐郡揖斐川町（旧谷汲村）末福遺跡（図12－32,33：紅村1963）

木曽川水系の管瀬川流域にある揖斐郡揖斐川町（旧谷汲村）深坂字末福に所在する。昭和30年（1955年）の河川改修工事の際に丸木舟が２隻偶然発見された。丸木舟は山間部の沖積地にある水田下1.5mの泥炭層から、縄文土器や櫂などと共に出土したという。

32は全長2.59m、幅45cmで、舟底の深さは18cmを測る。舟底の厚さは約8～12cmで、厚みのある作りである。舷側の一部が欠損しているが、遺存状況は良い。平面形は鰹節形で、両端部の形状にはわずかな違いがみられる。図下方の先端部はＵ字形で、他方は台形に近い形状を示す。縦断面形でもＵ字形先端部は舟底外面が急角度で立ち上がり、台形側は緩やかに立ち上がる。

横断面形は半円形ないしは半円特殊形の木取りであろう。舷側の立ち上がりが急角度で、舟底外面の曲面は平坦に近い部分もある。舟底には２か所の浅い凹みがあり、Ｕ字形側は先端部からやや離れたところにあるのに対し、台形側の凹みはＵ字形側のものより大きく、舟底の立ち上がりと一体化している。

材質はクスノキとされる。

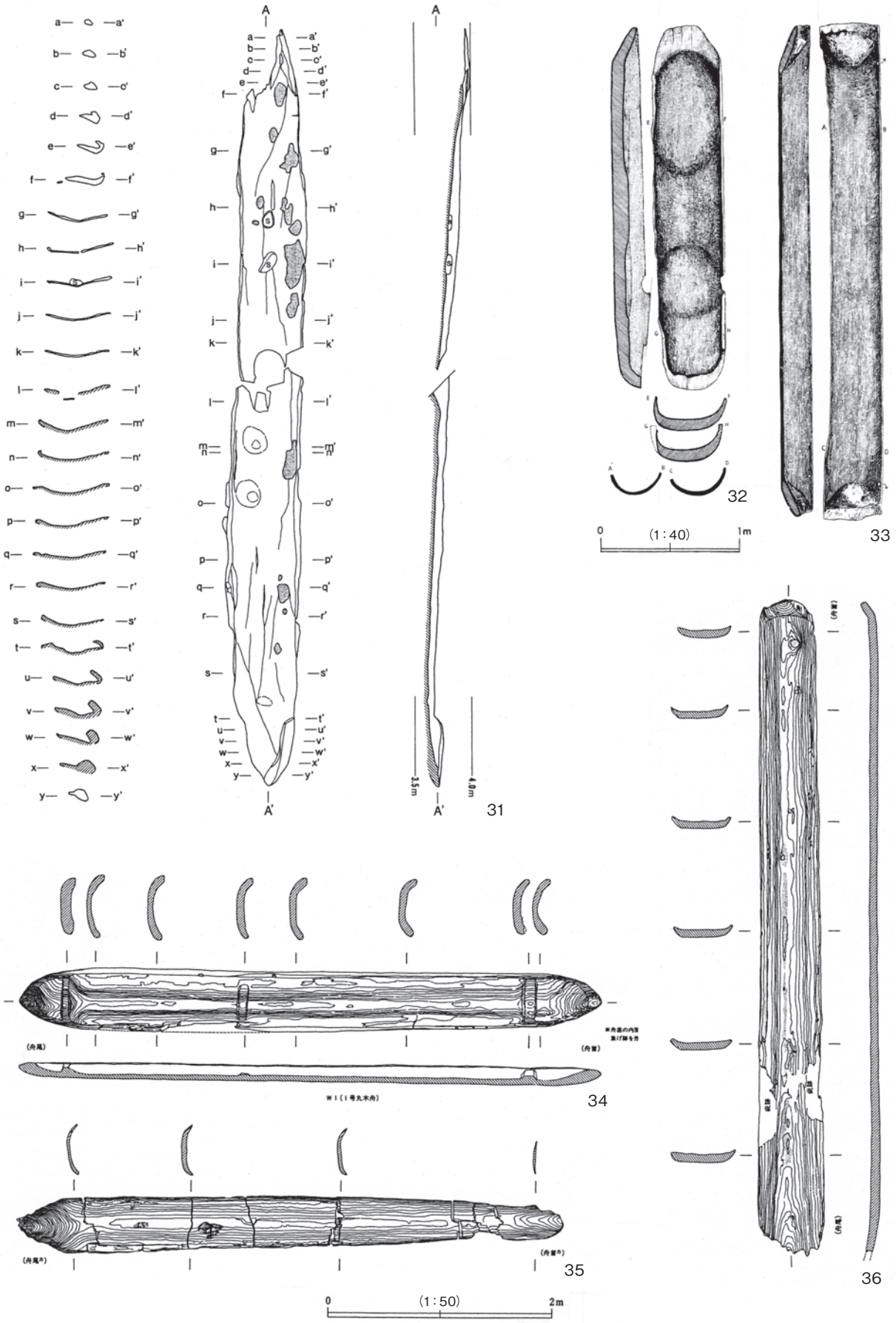


図12　出土丸木舟７（静岡県，岐阜県，福井県）

33は全長3.5m、幅43cm、深さ23cmである。片方の舷側の上部が欠損しているが、遺存状況は良い。厚さは約２cmと、32と比べて非常に薄い作りとなっている。平面形は、報告（紅村1963）にあるように「両端はほぼ真直に切断され、そのため全体の形は竹を半裁して一節を切取った形状に近い」形態をしている。割竹形ないしは箱形とすべきだろう。両端部の形状にほとんど違いはみられない。縦断面形でも舟底外面は両端部とも緩やかに立ち上がる。横断面形は半円形の木取りである。片方の舷側には、両端部の舟縁近くに小さな穿孔が1か所ずつある。係留のための装備か。材質は不明である。辻尾氏の集成にはアスナロという表記がある（辻尾2000）が、どちらを指すかは不明確である。

２例とも明確な時期は不明だが、縄文土器（中期から晩期）の伴出や単純な構造から、縄文時代に属するとされる。

【福井県】

28. 三方上中郡若狭町（旧三方町）ユリ遺跡（図12－34,35,36：田辺ほか2001）

国定公園三方五湖のひとつである三方湖の南東の旧三方町鳥浜・向笠に所在する。遺跡は三方湖に注ぐ鰣川とその支流の高瀬川に挟まれた一帯の水田域に立地している。近隣には縄文時代前期の低湿地性貝塚として著名な鳥浜貝塚がある。

平成２年（1990年）から３年（1991年）にかけて、圃場整備事業で三方町教育委員会が発掘調査を実施して、縄文時代後期から晩期の丸木舟４隻が出土した。

また平成18年（2006年）には、舞鶴若狭自動車道の建設に伴って福井県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施して縄文時代の丸木舟５隻が出土した（清水ほか2012）。

ここでは遺存状況の良かった１号（34）・２号（35）・４号（36）丸木舟について取り上げる。これらはいずれも平成２～３年（1990～1991年）の調査で出土した。

１号丸木舟（Ｗ１）（34）は、海抜2.6m付近の湖沼底基盤層の上面で検出された。舷側の一部を欠損するが、ほぼ完形である。全長5.22m、幅51cm～56cm、厚さ4～6cmを測る。平面形は両端部が尖る鰹節形で、形状の違いはほとんどない。図右方が舟首とされる。舟体の幅は均等ではなく、舟首が51cmに対して舟尾は56cmとなっており、舟首に向かって細くなっている。縦断面形でも大きな違いはなく、両端部とも舟底外面が緩やかに立ち上がる。舟体の深さは9～10cmで、均等に浅い。

舟底には横帯（横梁）が３か所削り出されている。舟首・舟尾に近いところに１か所ずつと、中央よりやや舟尾寄りの１か所である。横帯の作りには違いがあり、舟首と中央付近の断面が台形状を呈するのに対し、舟尾の横帯は舟体内側の面が緩やかなカーブを描いて舟底とつながっている。また、横帯と先端部との距離も舟首と舟尾では違いがある。この横帯の加工状態が、舟首・舟尾を決めるポイントであったという。

横断面形は単純な半円形ではなく、逆台形を呈する部分がある。舟体の中央付近では、舟底内外面ともに平坦面が作出されているようである。先端部付近に年輪が集中することから、木取りは芯に近い部分を用いた凹形か。

本例の時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果、縄文時代後期前半とされる。材質はスギである。

２号丸木舟（Ｗ２）（35）は、海抜1.3m付近の有機砂質土内から当時の湖岸と直行する状態で出土した。片方の先端部と舷側の大部分を欠損している。現存長4.9m、最大幅48cm、深さ7.5cm、厚さ3～5cmを測る。

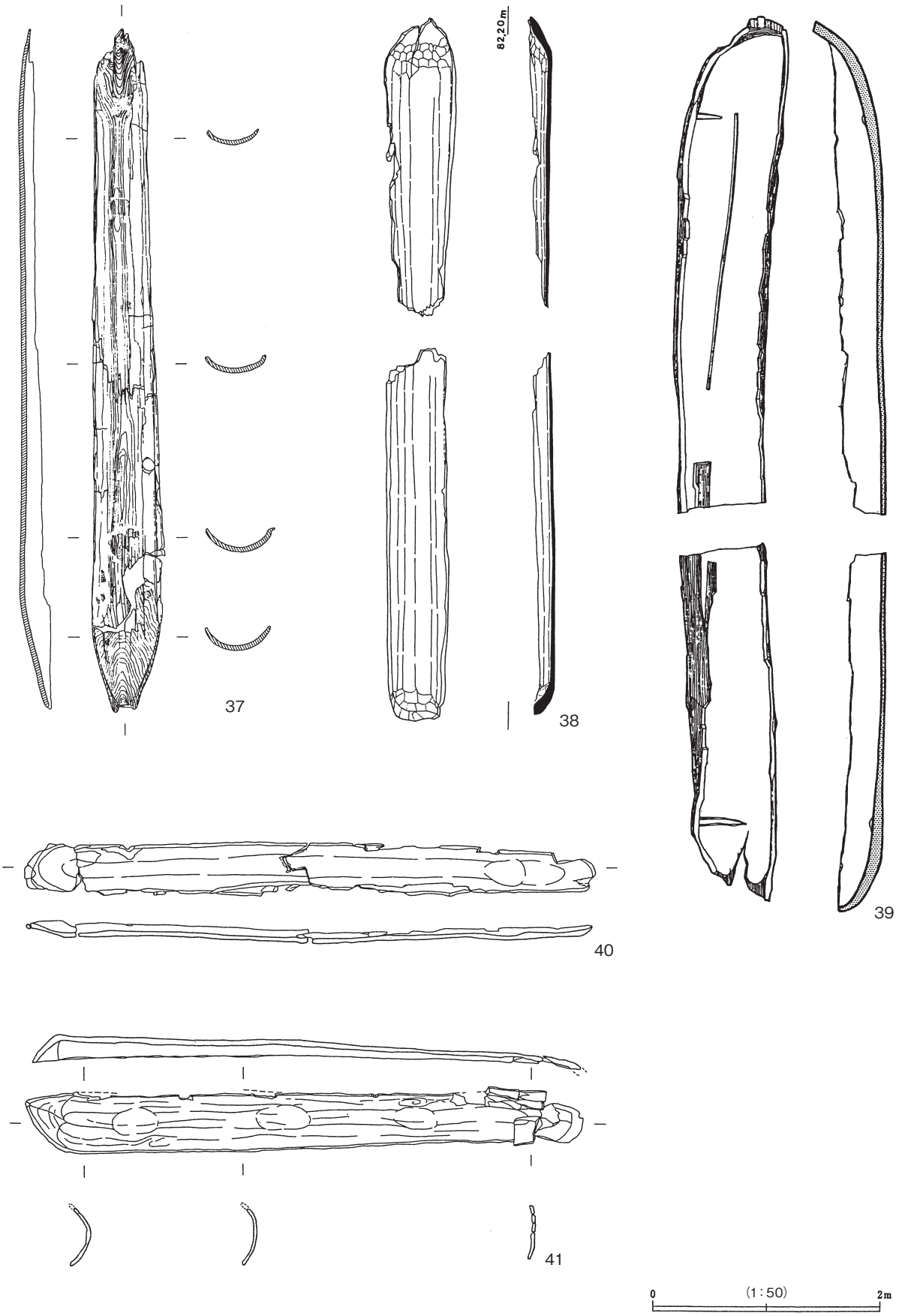


図13　出土丸木舟８（福井県，滋賀県）

欠損した先端部の形状が不明であるが、遺存している先端部から平面形は鰹節形と推定される。34よりも直線的に尖ったＶ字形を呈している。横断面形は34と同じく単純な半円形ではなく、舟底外面が平坦に作出されているようである。また、同じく先端部付近に年輪が集中することから、木取りは芯に近い部分を用いた凹形か。

本例の時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果、縄文時代晩期前半とされる。材質はスギである。

４号丸木舟（Ｗ４）（36）は、海抜２ｍ付近の植物遺体を多量に混在する砂質シルト層から、当時の湖岸と直行する状態で出土した。片方の先端部（図下方：舟尾とされる。）を欠損しているが、全容をうかがえる遺存状況である。現存長5.87ｍ、最大幅57㎝、厚さ６㎝前後を測る。舟首部の幅は45㎝で、34と同じく舟首に向かって細くなっている。舟首の形状は34・35と異なる。丸みを帯びてはいるが、方形に近い形状と言えよう。欠損した舟尾の形状が不明であるが、平面形は鰹節形ないし折衷形か。縦断面形では、34に比べて舟首の舟底外面がやや急角度で短く立ち上がる。舟尾側は緩やかに立ち上がる傾向があり、両端部の作りに違いがみられる。横断面形では、明確な逆台形を呈しており、舟底外面を平坦に加工している。先端部付近に年輪が集中することから、木取りは芯に近い部分を用いた凹形であろう。

本例の時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果、縄文時代晩期前半とされる。材質はスギである。

29. 三方上中郡若狭町（旧三方町）鳥浜貝塚（図13－37：鳥浜貝塚研究グループ1987）

三方湖の南東の旧三方町鳥浜字高瀬に所在する。遺跡は三方湖に注ぐ鰣川と高瀬川が合流する地点一帯の、河床下や周辺の水田下に展開する。昭和37年（1962年）に河川の護岸工事がきっかけで本遺跡が発見されて以来、昭和60年（1985年）までに10次にわたる発掘調査が行われている。丸木舟は２隻発見されているが、第６次調査（1981年）で出土した第１号丸木舟（37）について取り上げる。

37は貝層下の有機物層中から出土した。縄文時代前期の北白川下層Ⅱa式土器が伴出している。図の上方が舟首、下方が舟尾とされる。舟首の先端を欠損し、舟尾の一部を鋼矢板で破損しているが、ほぼ完形である。現存長6.08ｍ、最大幅63㎝、深さ26㎝、厚さ3.5～4㎝を測る。舟体の幅は舟尾付近で最大となり、舟首に向かって細くなっている。深さも舟尾で最も深く、舟首に向かって浅くなっている。舟尾には突起が２か所あり、突起に近い部分の舷側に艫綱をかけたような痕跡が観察される。

平面形は鰹節型に分類されよう。舟首の形状は不明だが、舟尾はＶ字型と言える。ただし単純な形状ではなく、端部はカットされその両脇が前述の突起になっている。縦断面形では舟底の外面が舟首・舟尾とも緩やかに立ち上がっているが、その角度には違いがあり、舟尾がより高く立ち上がるようである。それに呼応して舟底の深さも舟尾が深くなる。横断面形から木取りは半円形である。

時期は^{14}Ｃ年代測定の結果から約5,500年前の縄文時代前期とされ、伴出土器の年代観とも一致する。材質はスギである。

【滋賀県】

30. 近江八幡市長命寺湖底遺跡（図13－38：宮崎1984）

遺跡は琵琶湖東南部の近江八幡市長命寺町地先に所在し、湾状の入浜の湖底に立地している。近隣には縄文時代の丸木舟を複数出土した元水茎遺跡がある。長命寺港改修工事に伴い、昭和57年（1982年）度・昭和58年（1983年）度に財団法人滋賀県文化財保護協会により発掘調査が行われた。地山粘土層の上に堆

積した暗灰褐色砂層中から、縄文時代晩期の滋賀里Ⅳ式土器と共に丸木舟が出土した。「現在の湖岸より数十m沖合まで拡がっていた湖岸線に入り込んだクリークがあり、その岸辺近くで舟尾を陸地に向けた状態で」出土している（宮崎1984）。

38は舷側と舟首の一部を欠損し、調査用の排水路で中央付近を破損したが、ほぼ全容を知り得る良好な遺存状態である。全長６m、最大幅60cm、厚さ２cmを測る。先端部の一方（舟首）は尖らせ気味に、他方（舟尾）は隅丸方形に仕上げている。平面形は折衷形に分類され、舟首と舟尾を明確に作り分けている。縦断面形から見ても、舟首は舟底外面が比較的緩やかに立ち上がり、舟尾は舟首より厚みがある作りで舟底の立ち上がりも傾斜が強い。

時期は伴出土器から縄文時代晩期とされ、材質は不明である。

31．近江八幡市元水茎（水茎Ｂ・水茎Ｃ）遺跡（図13－39：滋賀県教育委員会 1966）

琵琶湖南部に位置する旧元水茎内湖の近江八幡市元水茎町に所在する。昭和39年（1964年）に農業用水路の工事中に丸木舟が１隻発見されたことを受けて、滋賀県教育委員会が同年に発掘調査を実施して２隻の縄文時代丸木舟を検出した（第１次調査）。その際、さらに別個体の存在が報告されたため、翌年昭和40年（1965年）に第２次調査を実施した。その結果５隻の丸木舟が新たに出土した。なお、第１次調査地点を水茎Ｂ遺跡、第２次調査地点を水茎Ｃ遺跡ともいう。

これらは、元水茎内湖内に存在した砂洲の丘陵周辺に埋没し、青灰色地山粘土層の上に堆積した砂層中で検出された。砂層からは縄文時代後期初頭彦崎ＫⅡ式土器が出土している。このうち第２次調査で出土した第１号丸木舟（39）を図示する。

39は砂州の内湾部で灰白色砂層上から出土した。舟底に長さ2.48mの丸木状の自然木が密着して検出されている。片方の先端部が欠損し、舟体の中央付近が農業用水路の掘削で損壊しているが、最も遺存在状況が良く、全体の形状を復元できる。全長7.9m、幅は75cm、厚さは約５cmを測る。図上方の先端部は幅約90cmで最大幅である。両端部に近い舟底に１か所ずつ、横帯が削り出されているが、片側のみに残存している。平面形は鰹節型で、両端部とも同様のＵ字形を呈しているとみられる。縦断面形では舟底外面の立ち上がりに違いが認められる。幅広な先端部側が反りあがり、舟縁が高くなっている。舟底内面には炭化した部分がある。

時期は周辺出土土器から縄文時代後期初頭とされる。材質は不明である。

32．彦根市松原内湖遺跡（図13－40・41、図14－42：滋賀県教育委員会 1993）

琵琶湖北東部の旧松原内湖沿岸に面する彦根市松原町地先に所在する。下水道処理施設建設に伴って財団法人滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。昭和59年度の試掘調査を経て、昭和60年度（第1次調査）から平成３年度（第７次調査）までの発掘調査で丸木舟11隻が出土している。このうち、比較的遺存状況の良い３例について図示する（図13－40・41、図14－42）。これらの丸木舟は、縄文時代後・晩期の土器を含む茶褐色スクモ層（腐植土層）から検出された。丸木舟の検出レベルが旧内湖の汀線と考えられている。

１号丸木舟（40）は片方の先端部と舷側のほとんどを欠損しているが、全容を推測できる遺存状況である。舟体は現存長５m、推定幅約50cmとなる。深さは7cmを測る。厚さは約４cmである。遺存している先端部（図

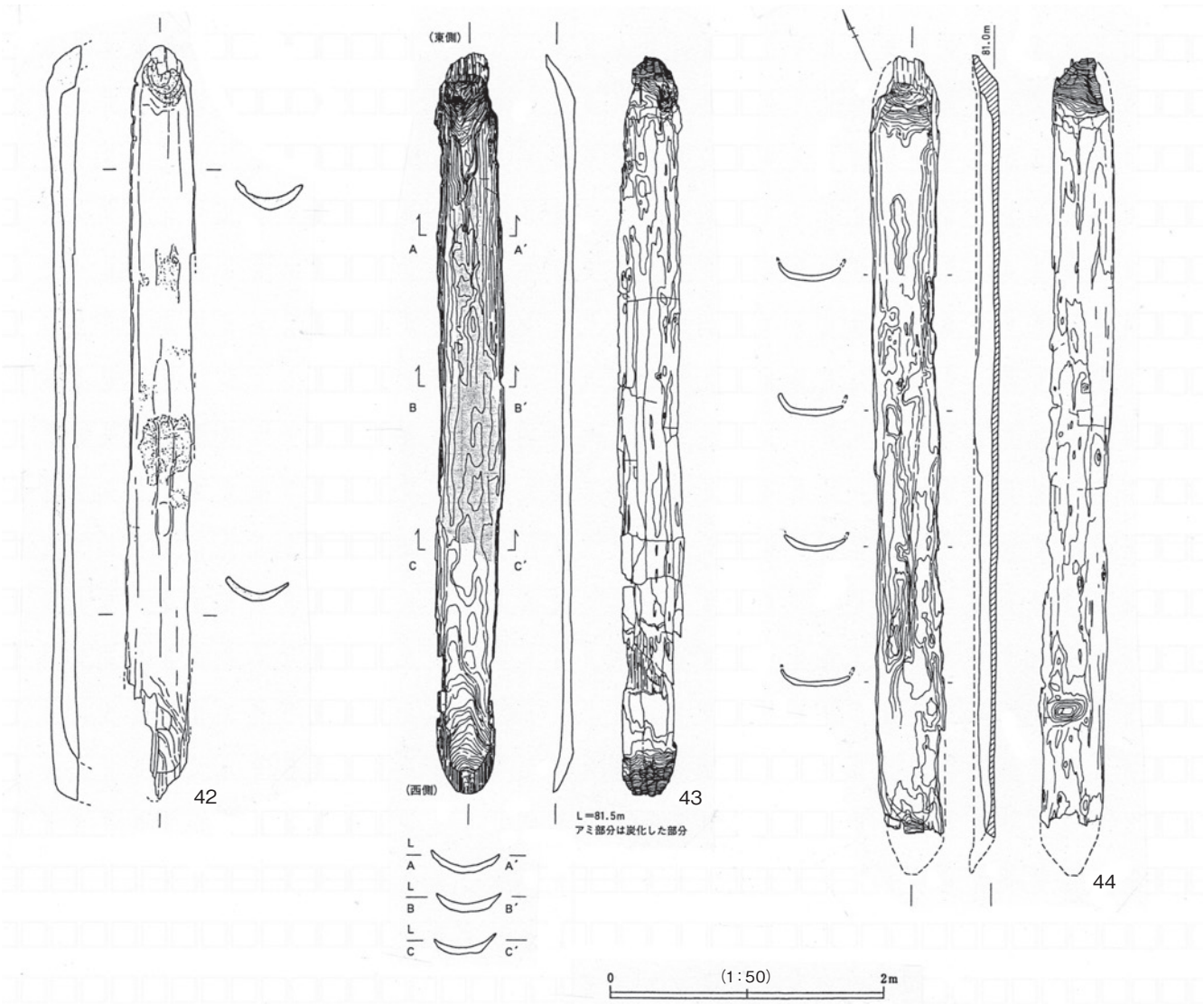


図14 出土丸木舟9（滋賀県２）

左方）は丸みを帯びたU字形とみられ、平面形は鰹節形と推定される。縦断面形では、両端部とも舟底外面が緩やかに立ち上がるとみられる。現状では舟首・舟尾の区別はつかない。

時期は縄文時代後期で、材質はスギである。

４号丸木舟（41）は片方の先端部と片側の舷側のほとんどを欠損しているが、全容を推測できる。舟体は現存長4.9m、幅50cm、深さ18cmを測る。厚さは4～5cmである。遺存している先端部（図左方）は長軸線中央からずれていて、V字形に尖る形状を呈している。他方の先端部形状は不明だが、平面形は鰹節形か。断面形では、V字形先端部は舟底外面が短く急に立ち上がり、他方は緩やかに立ち上がる傾向がみられる。横断面形は概ね半円形で、V字形先端部の近くではやや鋭角なカーブを描く。

時期は縄文時代晩期で、材質はスギである。

11号丸木舟（42）は片方の先端部の一部と舷側の一部を欠損しているが、当遺跡で出土した丸木舟の中では最も全容が判明している。全長5.87m、幅48cm、深さ16cmを測る。40・41に比べて舟底が厚く、約８cmあり、先端部に向かってさらに肥大していく。形状の明らかな先端部（図上方）は、丸みを帯びて尖る形状で、他方も概ね尖る傾向がある。平面形は鰹節形である。縦断面形では、両端部とも厚みがあり、舟

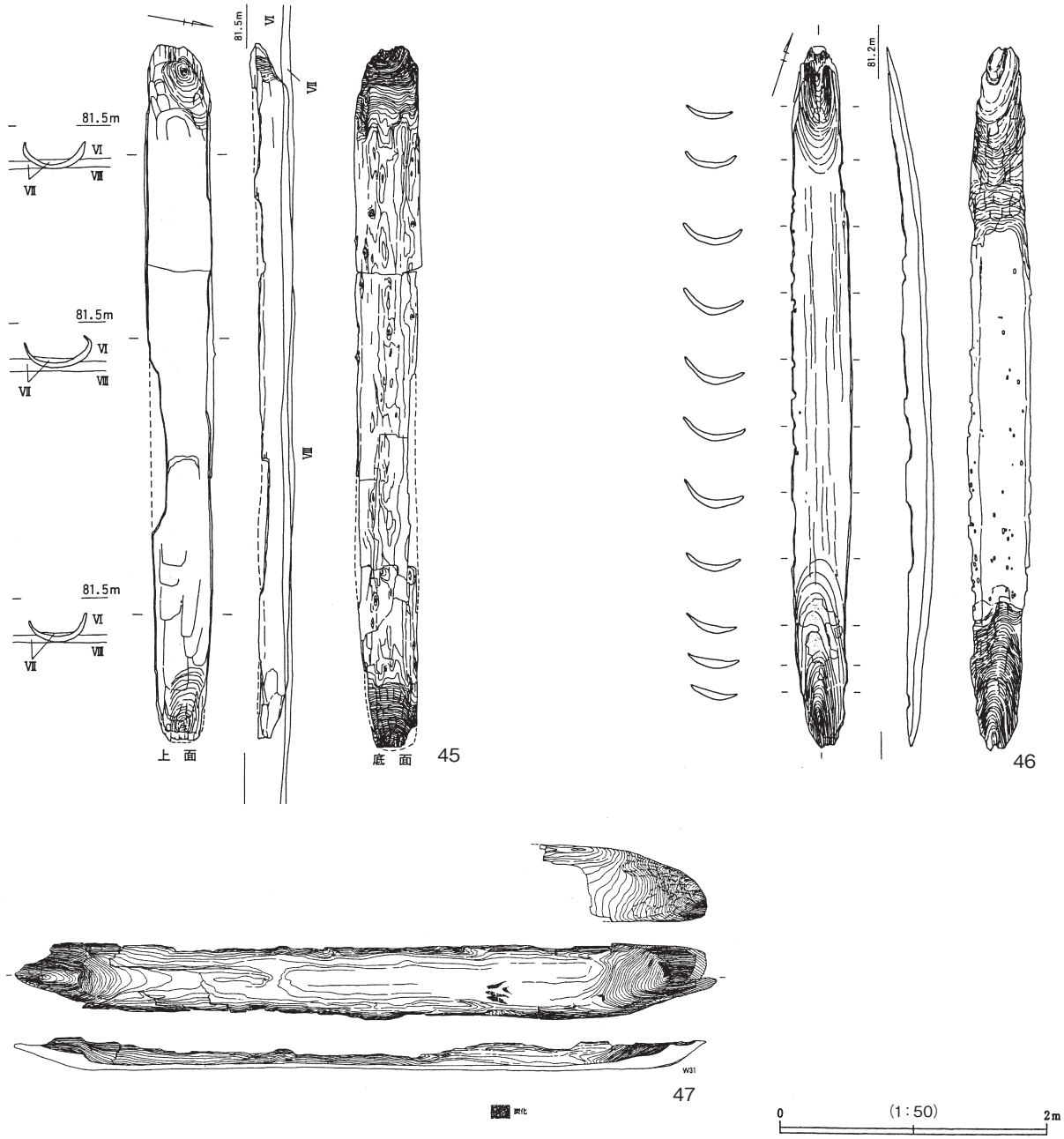


図15　出土丸木舟10（滋賀県３）

底外面が短く急に立ち上がる。両端部は似たような形態を示しているが、舟底外面の立ち上がりは欠損部側（図下方）に比べて他方はやや緩やかと言える。また、舟底内部は逆に欠損部側が緩やかに立ち上がっている。舟底内面には炭化した部分が観察される。

時期は縄文時代晩期で、材質はモミである。

33. 米原市入江内湖遺跡（図14－43,44、図15－45,46:瀬口ほか2007）

琵琶湖北東部に位置する旧入江内湖内の米原市入江地先に所在する。国道バイパス工事に伴って財団法人滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。平成12年度・13年度の試掘調査で丸木舟が１隻、平成14年度・15年度の発掘調査で丸木舟４隻が出土した。このうち遺存状況の良い３例と全体状況がわかる１例

を図示する。

１号丸木舟（図14－43）は暗緑灰色粘質土上面から正位の状態で出土した。舷側部等に若干の欠損があるが、ほぼ完形である。全長5.44m、幅48cm、深さ20cmを測る。厚さは6～7cmである。平面形は鰹節型で、先端部の形状は両端部ともＵ字形を呈す。縦断面形では舟底の立ち上がりにわずかな違いがみられ、図上方の先端部では、舟底外面が他方より高く立ち上がっている。舟底外面は樹皮直下で、横断面形からも、木取りは半円形である。舟体内面の両端部と中央部に炭化した部分がみられる。

時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果等から縄文時代中期末～後期初頭[6)]とされる。材質はモミである。

２号丸木舟（図15－45）は旧河道の第Ⅶ層（白灰色中粒砂）中より、等高線と併行するように正位の状態で出土した。43と同じく舷側部等に若干の欠損があるが、ほぼ完形である。舷側の残りは最も良い。全長5.27m、幅51cm、深さ26cmを測る。厚さは3～4cmである。平面形は鰹節型で、先端部の形状はＵ字形に近い形を呈する。図下方の先端部は方形に近いとも言えよう。側面形は逆台形を呈する。舟底外面の立ち上がりの角度には違いがみられ、図上方の先端部はやや急な角度で立ち上がるのに対し、他方は緩やかである。43と同じく舟底外面は樹皮直下で、木取りは半円形ないし半円特殊形か。舟底外面が一面に炭化している。

時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果等から縄文時代中期末とされる。材質はモミである。

４号丸木舟（図14－44）は、縄文時代遺物包含層（第Ⅶ層）の後に堆積した第Ⅵ層（暗灰色粘土）から正位の状態で出土した。片方の先端部と舷側のほとんどを欠損するが、全容をうかがえる遺存状況である。現存長5.7m、幅52cm、深さ18cmを測る。厚さは４cm前後である。遺存する先端部の形状はＵ字形で、他方の先端部は不明であるが、平面形は鰹節型と推定される。側面形は44と同じく逆台形と推定される。縦断面形を見ると、先端部の舟底内部は段を持つように加工されている。本例も樹皮を剥いだだけの作りで、横断面形も概ね半円形を呈してはいるが、舟底と舷側で曲線が異なる印象を受けることから、単純な半円形ではないのかもしれない。

時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果から縄文時代後期前葉とされる。材質はモミである。

５号丸木舟（図15－46）は、旧河道（Ⅶ層下河道）の堆積層（灰色粗砂）から流路に直交する方向で、正位の状態で出土した。旧河道が埋没する過程でともに埋まったと推定される。舷側に若干の欠損があるが、ほぼ完形である。全長5.29m、幅46cm、深さ21cmを測る。厚さは６cm前後である。平面形は、両端部がＶ字形に尖る鰹節形である。舟底は水平ではなく、側面から見ると緩やかな弧状を呈している。本例も舟底外面は樹皮直下で、木取りは半円形である。形態上は舟首・舟尾の区別はつかない。

時期は、^{14}Ｃ年代測定の結果等から縄文時代前期前半とされる。材質はヒノキである。

34. 東浅井郡湖北町尾上浜遺跡（図15－47：中川ほか2003）

遺跡は琵琶湖北部の東浅井郡湖北町尾上地先に所在し、旧余呉川の河口付近に拡がる。琵琶湖開発事業に伴い、昭和57年（1982年）度から財団法人滋賀県文化財保護協会が琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡の発掘調査を行なった。本遺跡は平成元年（1989年）度に調査され、湖底から約３m掘り下げた第４遺構面で、縄文時代後期の旧河川から丸木舟（47）が検出された。47は旧河川の流路肩で、流路と平行な向きに正位の状態で出土した。出土層位は縄文時代後・晩期の土器を含むスクモ層（15層）で、弥生土器を含む灰色粗砂層（14層）が舟体を覆っていた。

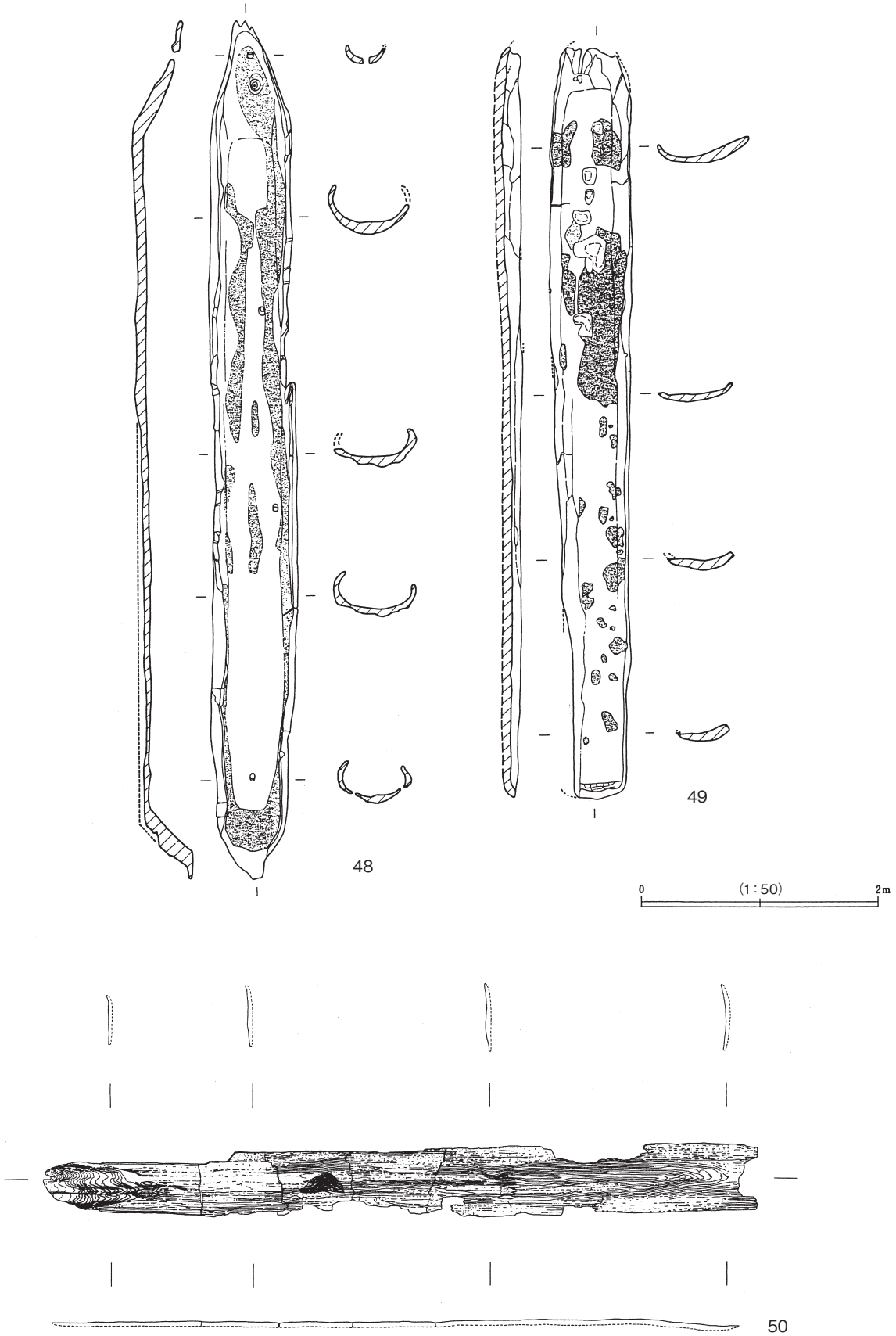


図16　出土丸木舟11（鳥取県，島根県）

舟体は片側の先端部と舷側の立ち上がりが欠損しているが、全形のわかる良好な遺存状態である。現存長5.5m、最大幅60cmを測り、復元された深さは35cmになる。舟底の厚さは概ね3.5cmであるが、先端部は20cm程度に厚くなっている。企画展図録（財団法人滋賀県文化財保護協会2006）によると、先端部が遺存する側（図右方）を舟首とする。舟首は細く尖るＶ字形を呈しており、平面形は鰹節形と推定される。縦断面形では、舟底外面の作りにわずかな違いがみられる。舟首は短く高く立ち上がる傾向があるのに対し、舟尾は緩やかな立ち上がりを示している。舟体内面の一部に炭化した部分がみられる。

時期は出土層の土器出土状況から、縄文時代後・晩期と考えられている。材質はモミである。

本例をモデルに丸木舟を復元製作して、調査の翌年の平成２年（1990年）に実験航海が行われた。遺跡から５km沖合の竹生島まで、２人の漕手が乗船して１時間40分で到達した。この実験により、当時の丸木舟が河川や内湖だけでなく、琵琶湖でも航行できたことが確かめられた（横田1992）。2006年には、「丸木舟の時代」展の関連行事として、この復元丸木舟の試乗体験イベントが近江八幡市で開催された（財団法人滋賀県文化財保護協会・安土城博2007）。

【鳥取県】

35. 鳥取市桂見遺跡（図16－48、49：牧本・小谷ほか1996）

鳥取県東部に位置する湖山池南東部の、鳥取市桂見字八ツ割・堤谷に所在する。県道整備事業に伴って、鳥取県教育文化財団が平成５年（1993年）度から３か年の発掘調査を実施した。八ツ割地区の縄文シルト層から、残りの良い丸木舟が２隻（48、49）、正位の状態で出土した。２隻が出土したシルト層は、縄文時代後期の北白川上層式土器を包含している。当遺跡では複数の櫂も出土している。

１号丸木舟（48）は、排水溝掘削の際に舟縁の一部を損壊したが、舟首側（図上方）の先端部をわずかに欠損するほかは、ほぼ完形に近い遺存状況である。現存長7.24m、幅74cmを測り、現存する縄文時代丸木舟としては最大級クラスに属する。舟体の深さは35cmで、舟底の厚さは８cm前後である。

平面形は両端部が尖る鰹節形であるが、細かく見ると舟首はＶ字形に細く尖り、舟尾はＵ字形に近い形状で、先端部が突起状になっている。舟首には貫通孔がある。縦断面形では、舟底の立ち上がりに違いがみられる。舟首は緩やかな弧状に立ち上がるのに対し、舟尾は短く急角度で立ち上がっている。横断面形にも特徴があり、舟縁が内側に湾曲しており、前述のように深さがある。舟首と舟尾に原木の芯が確認されるので、木取りは半円特殊形であろう。

２号丸木舟（49）は、舟首（図上方）と舷側の一部を欠損しているが、全容を推定できる良好な遺存状況である。現存長6.41m、幅46～70cmを測る。現存する深さは10cmで、舟底の厚さは6～8cmほどである。舟首の形状が不明確だが、概ね尖る傾向がある。一方、舟尾は明らかに方形を呈していることから、平面形は折衷形と推定される。断面形では、縦断面・横断面とも深みのない浅い作りになっている。木取りは原木の樹皮側1/3を用いた半円形である。48,49ともに、舟体の内面に炭化した部分がみられる。

48,49の時期は、包含層の遺物からともに縄文時代後期中葉とされる。材質もともにスギである。

【島根県】

36. 松江市島根大学構内遺跡（図16－50）

宍道湖沿岸の松江低地に位置する島根大学構内の松江市西川津町1060番地に所在する。旧字名は橋縄手

と言う。大学構内の施設増改築工事に伴い、平成６年（1994年）に島根大学埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。

縄文時代前期初頭から前半の遺物を含む黒色腐植土（第５a層）の上面付近に倒位の状態で出土した。片方の先端部と舷側の多くを欠損し、土圧で舟体が板状に潰れていた。遺存状況は良好とは言えないが、千葉県雷下遺跡例に次ぐ古さを有することから、初期段階の出土例として取り上げる。

50は現存長6.4m、最大幅57cmを測り、最大の厚さは推定約４cmほどである。現存する先端部の形状が尖頭状のＵ字形ないしＶ字形を呈することから、平面形は鰹節形か。断面形については前述のように水平な板状になっており、本来の縦断面形や横断面形は復元できない。現状で言える舟体構造の特徴としては、６ｍを超える大型舟であること、平面形は鰹節形の可能性が高いことであろう。両端部の幅には違いがあり、形状も異なるのかもしれない。

時期は、伴出遺物から縄文時代前期初頭～前半とされる[7)]。材質は板目のスギである。

４　舟首（舳先）と舟尾（艫）の区別について

（１）両端部の差異に関して

ここまで、縄文時代（ないしはその可能性のあるものも含め）の出土丸木舟について見てきた。形態の記述に用いた清水分類の「箱形」は、単に長方形という見方もあり、片側が方形を呈する折衷形は鰹節形と箱形の折衷という認識としたい。

舟体両端部の形状を比較すると、Ａ類：両端部の形状に違いがあるもの、Ｂ類：平面的形状に大きな差異はないが構造が異なるもの、Ｃ類：形状・構造とも差異のないものに分類することができる。Ａ類は清水分類の折衷形が相当する。Ｂ類は、清水分類の鰹節形のうち、縦断面形で舟底の立ち上がり角度が異なるもの、先端形状の尖り具合が異なる（Ｖ字形とＵ字形）もの、横梁・突起・穿孔など付帯施設に差異があるものが含まれる。Ｃ類は両端部がほとんど同じ形状・構造のものである。鰹節形は従来このようにとらえられてきた。

両端部に差異があるか否かという視点は、荒川氏が提唱する平面形分類の前後対称という観点と合致する。ただし本稿で問題としているのは、単に上面観での違いの有無ではなく、断面構造や付帯施設も加味した舟体の構造的な違いである。

そこで、荒川分類の「前後対称形」の中から、舟底の立ち上がりや横梁との関係や穿孔など、両端部で違いが存在する事例を抽出してみた。それがＢ類である。

Ｂ類の具体例を見ていくと、取り上げた50例のうちおよそ半数は含まれる。荒川氏が平面形の類型モデルとした鳥取県桂見遺跡を例にとると、１号丸木舟（48）は確かに両端が尖る形状をしているが、長軸断面を見ると舟底の立ち上がりや細部の構造に明らかな違いが認められる。舟首はゆるやかに立ち上がり、舟尾はやや急角度で短く立ち上がる。平面形状も長く尖るＶ字形と丸みを帯びたＵ字形の違いもあるので、三次元的な印象はさらに異なる。そして舟首の先端近くには貫通孔があり、舟尾の先端には突起がある。どちらが前後かということは抜きにしても、それぞれの先端部を意識的に作り分けていた可能性は高い。

では次に、これらの違いが前後の区別とどう結びつくのか。その前に一旦、丸木舟がどのように使われるかについてイメージしておきたい。

（２）使用時のイメージについて

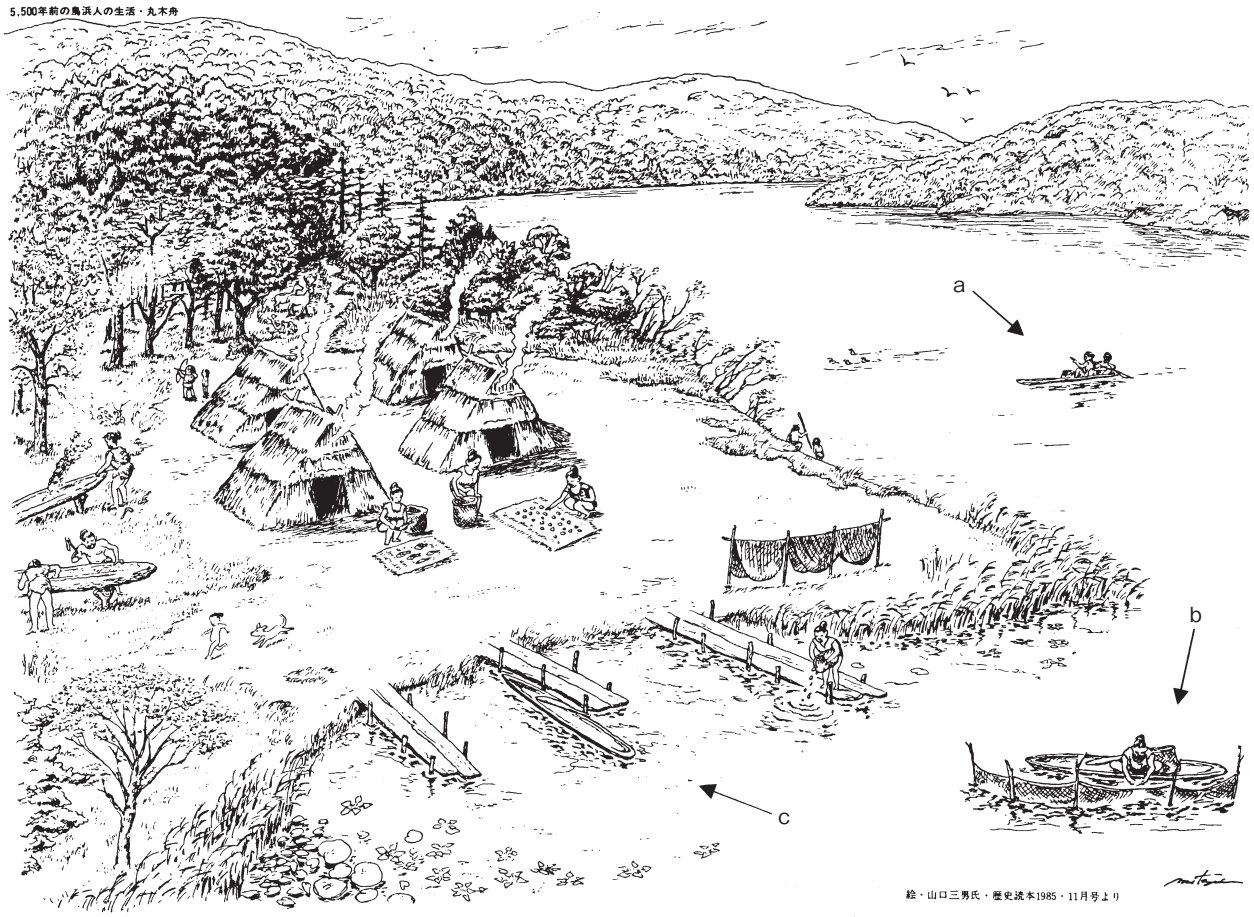
あらためて舟首と舟尾の区別を考えるとき、本来は使用状況に関する検討も必要であろう。出土例そのものは使用状態を推測するしかないが、このアプローチに出土事例の復元実験は参考になる。

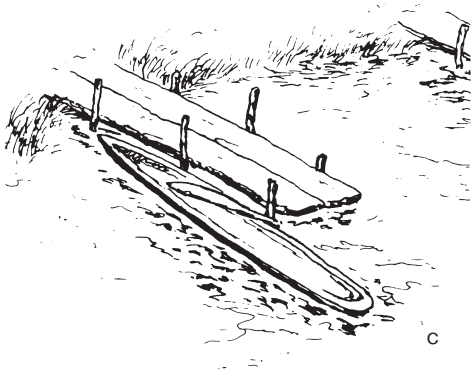
琵琶湖沿岸での滋賀県尾上浜遺跡出土事例の復元製作と実験航海（横田1992、小竹森2007）や、福井県鳥浜貝塚の復元製作及び試験進水（小林2008）などが知られている。尾上浜遺跡の復元舟（さざなみの浮舟）では、内湖ではなく琵琶本湖での航行が実証された。一般を対象とした琵琶湖での試乗体験では、カヌーインストラクターから安定性と小回りが利く評価を得たという。

さらに、国立科学博物館の「３万年前の航海 徹底再現プロジェクト」では、台湾から与那国島へ渡る方法を草束舟・竹筏舟と試した結果、丸木舟でなければ黒潮を超えられないという実験結果を得た（海部2020）。そのとき製作された丸木舟「スギメ」は、縄文時代遺跡からの出土事例を参考にしながらも、特定のモデルを再現したのではなく、渡海という目的を達成するため作り手・漕ぎ手・研究者が意見を出し合って製作された。写真１で示した実際の航海の様子が、丸木舟の使用時の姿をよくとらえている。波を切る舟首は水面から少し浮き上がっている。

鳥浜貝塚の再現イラスト（図17・福井県立若狭歴史民俗資料館1985）に見る丸木舟も、まさにこの状況を表現していた（図17－Ａ）。鳥浜貝塚のイラストには他にも丸木舟の使われ方を示す箇所があり、形態の違いも表している。図右下ではＣ類の舟が水上で停止して採集作業をしているようだ（図17－Ｂ）。図中央下部の岸辺には、Ｂ類の舟が係留されている（図17－Ｃ）。岸側の先端部はＶ字形で、湖水側はＵ字形のようだ。

写真１　海を航行する丸木舟スギメ（東京大学HP内 広報誌『淡青』vol.49より　画像提供：国立科学博物館）





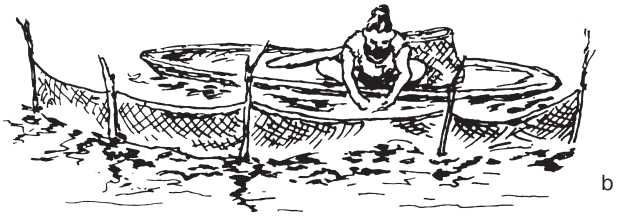


図17　鳥浜貝塚の再現図に見る丸木舟の使われ方
（福井県立若狭歴史民俗資料館1985『特別展 いま甦る丸木舟』11p図「5,500年前の鳥浜人の生活・丸木舟」から転載・加筆・切り抜き）

全国の丸木舟を観察している和船研究家の松井哲洋氏[8]に伺ったところ、本来丸木舟はどちらにも進めるようになっているという。たとえ上面観が前後非対称だとしても、進むためには水面下の構造は同じでなければならないという。それでも波のある水面では、波切りのために進行方向側（舟首）を流線形にすることはあるだろうが、河川や穏やかな内水面環境では必要としない。にもかかわらず、明らかに内水面で使用していたであろう出土丸木舟にも、Ａ類やＢ類の舟が多く存在する。

5　おわりに

今回は前後対称に見える丸木舟の舟形にも、前後の違いを意識していたと思われるＢ類が存在することを確認した。先端部構造の違いが前後の区別とどう結びつくのか検討するまでには至らなかったが、今後も個別事例の詳細を通じて明らかにしていきたい。

最近、千葉県山武郡横芝光町の高谷川低地遺跡で、一か所から15隻の縄文時代丸木舟が出土する調査成果があった（公益財団法人千葉県教育振興財団2024）。舷側が完存する事例も含まれるので、今後の分析に期待したい。

註

１）石井氏は、板状部分の小孔の存在からこちらを舟尾ととらえている。
２）草加市ホームページの記載による。
３）草加市教育委員会生涯学習課高橋氏のご教示による。
４）測定時期には諸説あり。
５）筆者は以前に当事例の出土遺跡を島ノ間遺跡と紹介した（沖松2023）が、当遺跡の誤りである。なお、七升地点という名称はないが、同じ栗山川流域遺跡群の九蔵地点と区別するために今回用いた。
６）報告書では後期前葉としているが、「丸木舟の時代」展図録（財団法人滋賀県文化財保護協会2006）及び記録集（財団法人滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館2007）において更新されている。以下、２号・５号丸木舟についても更新されたデータを反映した。
７）「丸木舟の時代」展記録集の地名表では、早期末～前期初頭で転用品という位置づけがされている。
８）千葉県立関宿城博物館客員研究員

謝辞

執筆にあたり、次の機関・方々にご協力、ご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

国立科学博物館、福井県立若狭歴史博物館、草加市教育委員会、匝瑳市教育委員会、荒川隆史、西山太郎、松井哲洋、山田和史、濱田教靖、菊池健一の各機関・各氏。

引用・参考文献

西村真次　1916「関東発掘刳舟の二型式」『人類学雑誌』49-6
埼玉県　1931『埼玉縣史　第２巻　奈良・平安時代』
西村眞次　1938「先史時代及び原史時代の水上運搬具」『人類学・先史学講座』雄山閣
松本信廣ほか　1952『加茂遺蹟－千葉県加茂獨木舟出土遺蹟の研究』三田史學會
松本信廣　1952「上代獨木舟の考察」『加茂遺蹟－千葉県加茂獨木舟出土遺蹟の研究』三田史学会
玉口時雄ほか　1954「印旛沼出土の刳舟」『古代』第三號　早稲田大學考古學會
石井謙治　1957『日本の舟』　創元社
柳田敏司　1957「大宮市膝子出土の丸木舟について」『埼玉史談』第４巻第１号
櫻田勝徳　1958「現存漁船資料による日本の船の発達史への接近の試み」『日本の民具』角川書店

紅村　弘　1963『東海の先史遺跡　綜括編』名古屋鉄道株式会社
滋賀県教育委員会　1966『近江八幡市元水茎町遺跡調査概要』
渡辺直経　1966「縄文および弥生時代のＣ－14年代測定」『第四紀研究』第５巻第３～４号　日本第四紀学会
清水潤三　1968「古代の舟」『ものと人間の文化史　船』法政大学出版局
川越市史総務部市史編纂室　1972『川越市史　第一巻原始古代編』川越市
清水潤三　1975「日本古代の船」『日本古代文化の探求　船』社会思想社
辻　誠一郎・柿沼修平・田川　良　1977「千葉県多古町における丸木舟の出土とその年代」『第四紀研究』第16巻 第２号
埼玉県　1980『新編埼玉県史　資料編１　原始　旧石器・縄文』
西山太郎　1981『千葉県香取郡多古町南玉造出土の丸木舟』多古町教育委員会
松下邦夫　1982「４、横須賀から出土した丸木舟」『改定新版　松戸の歴史案内』郷土史出版
八日市場市史編さん委員会　1982『八日市場市史　上巻(原始・古代・中世)』
青木美代子ほか　1984『東北新幹線関係 埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅱ－　赤羽・伊奈氏屋敷跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第31集
宮崎幹也　1984『長命寺湖底遺跡発掘調査概要－近江八幡市－』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
大網白里町史編さん委員会　1985『大網白里町史』
田川　良・中西克也ほか　1985『千葉県八日市場市宮田下泥炭遺跡－独木舟の調査－』仮当川遺跡調査会
多古町　1985『多古町史（上巻)』
東北新幹線中里遺跡調査会　1985『中里遺跡・発掘調査の概要Ⅱ』
福井県立若狭歴史民俗資料館　1985『特別展　今甦る丸木舟－日本最古の鳥浜貝塚出土丸木舟公開記念展－』
大網白里町　1986『大網白里町史』
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所　1987『大谷川Ⅱ　昭和59・60年度 巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第11集
滋賀県埋蔵文化財センター　1987『滋賀埋文ニュース』第85号
鳥浜貝塚研究グループ　1987『鳥浜貝塚－1980～1985年度調査のまとめ－』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
草加市史編さん委員会　1988『草加市史　自然・考古編』草加市
中山吉秀　1988「千葉県の河川と低地遺跡－特に河川出土の独木舟を中心として－」『資料の広場』第19号　千葉県立中央図書館
八日市場歴史研究会　1990『桜井茂隆 文化財アルバム』
横田洋三　1990「縄文時代復元丸木舟（さざなみの浮舟）の実験航海」『紀要』第４号　財団法人滋賀県文化財保護協会
川崎晃稔　1991『日本丸木舟の研究』法政大学出版局
八千代市史編さん委員会　1991『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』
横田洋三　1992「縄文時代の丸木舟－復元と実験航海」『考古学ジャーナル』No.343
滋賀県教育委員会　1993『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う　松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ－彦根市松原町－』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
山田昌久　1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号　植生史研究会
桜井茂隆　1995「八日市場出土の古代独木舟」『無伴奏　桜井茂隆米寿記念論文集』（元出典　1956『千葉県文化財紀要』）
牧本哲雄・小谷修一ほか　1996『桂見遺跡－八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区－』主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１　鳥取県教育文化財団調査報告書45　財団法人鳥取県教育文化財団
橋口尚武　1997「渡海の考古学－東日本の丸木舟・準構造船と伊豆諸島－」『人類史研究』９
上野真由美　1998「Ⅴ　結語　１　大宮台地周辺の丸木舟について」『浦和市 大道東遺跡　芝川河川改修関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第212集
中原　斉　1998「山陰の丸木舟」『考古学ジャーナル』No.435
財団法人香取郡市文化財センター　1999『事業報告Ⅸ－平成10年度－』

辻尾榮一　2000「日本刳舟関係資料集成（予察報告１）『郵政考古紀要』28　郵政考古学会
四柳　隆　2000「落合遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県
田辺常博ほか　2001『ユリ遺跡』三方町文化財調査報告書　第14集
出口晶子　2001『ものと人間の文化史98　丸木舟』法政大学出版局
中川治美ほか　2003「尾上浜遺跡・尾上遺跡」『琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書７　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
松田真一　2003「物流をうながした縄文時代の丸木舟」『初期古墳と大和の考古学』学生社
荒川隆史ほか　2004『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第133集
高橋統一　2004「縄文丸木舟覚え書」『アジア文化研究所研究年報』39
東京都教育委員会　2004『文化財の保護』第36号
鈴木道之助・山岸良二　2004「（４）丸木舟」『千葉県の歴史　資料編　考古４（遺跡・遺構・遺物）』千葉県
山岸良二　2004「九十九里浜旧椿海周辺の縄文丸木舟」『時空をこえた対話－三田の考古学－』慶応義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集　六一書房
財団法人滋賀県文化財保護協会　2006『丸木舟の時代－びわ湖と古代人－』財団法人滋賀県文化財保護協会発掘調査成果展・滋賀県立安土城考古博物館第32回企画展図録
小竹森直子　2007「コラム２　縄文丸木舟、琵琶湖に漕ぎ出す－復元丸木舟の実験航海－」『丸木舟の時代－びわ湖と古代人－』（シンポジウム・講座記録）
財団法人滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館　2007『丸木舟の時代－びわ湖と古代人－』（シンポジウム・講座記録）
瀬口眞司　2007『入江内湖遺跡－米原市入江－』一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書1　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
小林加奈　2008「縄文時代丸木舟の復元製作実験」『考古学ジャーナル』No.574
清水孝之ほか　2012『福井県埋蔵文化財調査報告　第128集　ユリ遺跡－舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
松井哲洋　2012「丸木舟を訪ねて(1)－出土丸木舟観察時の要点と縄文時代丸木舟について－」『研究報告』第16号　千葉県立関宿城博物館
沖松信隆　2014「雷下遺跡の概要」『研究連絡誌』第75号　公益財団法人千葉県教育振興財団
小倉　均ほか　2017『南鴻沼遺跡』さいたま市遺跡調査会報告書177
荒川隆史　2018『平成30年度 夏季企画展　丸木舟の考古学』新潟県埋蔵文化財センター
中島広顕ほか　2018『史跡　中里貝塚　総括報告書』東京都北区教育委員会
服部智至･太田敬宏ほか　2019『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14－市川市雷下遺跡（１）～（４）･（７）～（10）』
海部陽介　2020『サピエンス日本上陸　３万年前の大航海』講談社
中山俊之・喜多裕明　2020『千葉県匝瑳市　多古田低地遺跡－豊和　埋蔵文化財調査業務－』公益財団法人 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第367集
荒川隆史　2021「新潟県における縄文時代の丸木舟による移動・運搬」『新潟県考古学会　2021年度秋季シンポジウム　発表要旨　「遺跡から読み取る新潟県の内水面交通」』
山田昌久　2022「縄文時代の丸木舟」『季刊　考古学』雄山閣
沖松信隆　2023「千葉県における縄文時代丸木舟の出土例について」『研究連絡誌』第88号　公益財団法人千葉県教育振興財団
公益財団法人千葉県教育振興財団　2024『50年のあゆみ　公益財団法人千葉県教育振興財団設立50周年記念誌』
西秋良宏　2024「東京大学総合研究博物館本郷本館で常設展示している丸木舟の由来と年代」『Ouroboros 東京大学総合研究博物館ニュース』第80号
草加市ホームページ「綾瀬川（旧新田村）出土丸木舟」2024更新
https://www.city.soka.saitama.jp/cont/s2105/030/010/010/PAGE000000000000034529.html